

No.31 March 2001

特集 宗教と性意識

Womanist



フェミニズム・宗教・平和の会

もくじ

特集 宗教と性意識

「日本化」した仏教と性意識
使命感信仰と因縁信仰

「日本人の性意識に宗教は関係しているのか、いないのか」という問いを

わたしは立てることができない

性意識と宗教——中絶に対する見方の変遷から

失われた輝きを求めて

一番星の性は

「あの出来事」

池田さんへの再反論について

女と国家——観念による呪縛

A『古事記』(二五)

スピリチュアリティにひかれて

人を当てにして生きることについて

身近な話題から

空き家ではなく

「フェミニズム・宗教・平和の会」と私

ジレンマのなかで

特別養護老人ホーム実習体験記

内なるディコンストラクションをめぐる

二〇〇〇年活動報告・会計報告

編集後記

奥田 暁子	1
勝又 美保	4
井桁 碧	7
小松加代子	15
小澤 治慧	18
山下 暁子	21
岡村 聡子	26
鶴岡 瑛	36
河野 信子	40
高橋としえ	41
小泉美奈美	42
飯田 智子	44
岩田 澄江	46
N	48
平野 裕子	49
平嶋三生子	52
榎村 忍	54
	59
編集後記	60

「日本化」した仏教と性意識

奥田 暁子

はじめに

第28号における池田さんの『慰安婦』問題から見た日本人と仏教」は日本人の性意識に宗教が関わっているのかどうかを問う重要な問題提起である。フェミニスト神学はキリスト教と伝統的な神学が西洋の人びとのジェンダー意識を形成する上で大きな役割を演じてきたことを徹底的に告発してきた。日本社会におけるこの問題はまだほとんど手つかずであるが、そろそろきちんとした探求がなされてもいい頃だと思う。しかしそうするためには、いくつかの困難な問題がある。まず、日本ではキリスト教国やイスラム教国と違って、宗教が目に見える存在になっていない。日本人の多くが無宗教であると答えるように、多くの人は葬式の時になって初めて宗教と向き合うような日常を送っている。したがって、まず宗教を意識化するところから始めなければならない。第二に、キリスト教やイスラム教に対応するのは日本では仏教だと考えられているが、後述するように、日本では仏教、儒教、神道が習合してしまっているため、仏教を問題にするのであれ

ば、本来の仏教に焦点を当てても問題の本質に迫ることはできない。さまざまな宗教と習合した「日本化」された仏教に焦点を当てなければならぬ。そう考えると今回のこの特集はあまりにも大きすぎる課題に挑戦したことになる。原稿を依頼した方々からつぎつぎに断られてしまったのもいたし方のないことかも知れない。しかし編集を担当する者としての責任上、問題提起を形にしなければならない。そこでまとまりのないものではあるが、短い原稿を書くことにした。

シスターフッドと「慰安婦」問題

本論にはいる前に、鶴岡さんの反論について考えてい。29号で鶴岡さんは日本人「慰安婦」が名乗り出なのは、加害国に属する人間であることと、その人の個人的な事情があったからだと言われている。しかしわたしはそのような見方には賛同できない。まず前者については、性暴力の被害者という視点に立てば、加害国・被害国の区別は問題にはならない。人道に対する罪は国境を越えて裁かれるはずである（少なくとも現時点ではそのような合意が国際的にも形成されていると思う）。後者に関しては、個人的事情を問題にするよりも、名乗りでることができない社会的状況を問題にすべきではないだろうか。むしろ、個人的な事情に問題を還元してしまう姿勢が個人を追いつめるので

はないだろうか。力のない、弱い個人が名乗り出ることもができるのは、名乗り出た場合に誰かが支えてくれるという確信があつてはじめて可能になるのだと思う。それなしには、だれもそんなことはしないし、できないだろう。レイプやセクシュアル・ハラスメントの被害者が長い間沈黙せざるを得なかったのは、法が整備されていなかっただけでなく被害者を守る基盤が社会になかったからである。日本人「従軍慰安婦」の問題についても、(「責任者処罰」の問題を別にすれば) わたしは日本のフェミニズムが成熟していなかったのが最大の原因であつたと考えている。

欧米のフェミニストが好んで使う言葉に「シスターフッド」がある。これは女性の連帯を表す造語であり、マイノリティや途上国の女性たちからは女性というだけで簡単にはシスターフッドを築くことはできない、と批判されてもいるが、シスターフッドはフェミニズムにとって「平等」や「自立」と同じように重要な思想である。この言葉は一般に宗教とは関係なく使われているように見えるが、その基盤にあるのはキリスト教である。シスターフッドというのは単に連帯を表すだけでなく、隣人(抑圧された人や差別された人)を愛するというキリスト者にとって最も重要な教えが基本にある。韓国やフィリピンの「従軍慰安婦」たちを支えたのはこのシスターフッドだったと思う。ところ

が、宗教的基盤がない日本のフェミニズムにはこのシスターフッドの思想は浸透しなかった。シスターフッドとは無関係に平等や女性の自立だけが主張されてきた。それが「従軍慰安婦」に限らず、性的被害を受けた女性たちを沈黙させてきたのではないだろうか。

宗教と性意識

さて、宗教と性意識の関連であるが、アメリカのフェミニスト歴史家、ゲルダ・ラーナーは膨大な資料に基づいて、家父長制は世界宗教が成立する前にすでに創出されていたとの結論を出している。ラーナーによれば、結婚を通じての女性の交換、女の捕虜を奴隷にすること、売春の制度化、家父長制家族を守るための法(たとえばハムラビ法典)の制定などによって、女性の地位は徐々に低下し、男性への従属が定着していった。宗教はその状況をシンボルとメタファーを通して人びとの意識に深く埋め込む役割を果たした(『男性支配と起源の歴史』三一書房)。

この視点に立てば、宗教が直接的に女性の従属をつくり出したとは言えなくとも、男性支配の制度を意識化し、浸透させる上で大きな役割を果たしたことになる。むしろ、性意識の形成に関しては宗教の役割が決定的であつた。欧米のフェミニスト神学者はキリスト教がそのような意識をつくりだし、普遍化する上で、

どのような役割を演じたかを一九七〇年代から研究してきた。ローズマリー・リューサーはキリスト教がギリシア思想から受け継いだ霊肉二元論を問題にしているし、エリザベート・モルトマン・ヴェンデルはパウロの女性観に性差別的な見方があったことを指摘している。メアリー・デیلیーは神学者や教皇たちの言説に救いようのない性差別思想を見るだけでなく、「父なる神」というキリスト教の根幹をなす思想そのものがセクシズムを再生産するのだと主張して、キリスト教を全面的に否定するに至っている。

日本の場合はどうであろうか。キリスト教について言えることは仏教にも当てはまるのだろうか。仏教と日本人の性意識が直接関係があるのかどうか、今のわたしにははっきりしたことは言えないが、すべての世界宗教が家父長制社会の中で成立したことを考えると、男性の性の放縦には寛大で女性には厳しい性の二重基準や性差別意識は当然仏教も共有しているだろう。しかしここで問題になっているのは「従軍慰安婦」問題に対する日本人の消極的な姿勢はなぜかということであるから、日本独自の性意識と宗教との関連を問わなければならない。そのためには、おそらく仏教の道徳観を問題にしなければならないのだろうが、先程述べたように日本では宗教が習合していると考えるなら、仏教独自のというより、他宗教と習合した仏教の

道徳観を検討しなければならないということになる。

湯淺泰雄は仏教と神道との習合、儒教と神道との習合、仏教と儒教との習合が次々に起こった日本の歴史を振り返って、仏教の密教化を指摘する（『日本人の宗教意識』講談社学術文庫）。仏教の「密教化」とは、湯淺によれば、「神道と仏教の習合する過程や仏教の呪術的儀礼が民衆の日常生活・習俗にまで浸透していく過程」である。もう少し易しく言いなおすと、日本では仏教が中国から受容されてこの国の土に根を下ろしたとき、「太古の日本人の生活に生きていた古い世界観はそっくりそのまま仏教の中に取り込まれ」、「農村共同体の習俗の中に生きていた原始信仰の伝統と深く結合することによって日本人の宗教になった」のである。

キリスト教やイスラム教は民族宗教と習合することではなく、民族宗教とぶつかると、それを排斥するといふかたちをとった。旧約聖書にはカナンの土地に入ったイスラエル民族が自分たちの唯一神信仰を守るために、カナンの多神教崇拜を徹底的に弾圧した物語がある。その後の歴史でも、宣教師たちによるキリスト教の宣教は先住民の宗教を弾圧し、排除するというように、習合することはなかった（もちろんわたしはこの歴史を肯定しているわけではない。植民地主義に通じるこの行為は西洋中心主義として厳しく断罪されねば

ならないし、もし世界宗教に他者を排斥するという思想が必然的に含まれているのだとしたら、その点を解明しなければならぬ。ところが、日本ではそのようなことは起こらなかった。

もう一つ日本の宗教の特徴として湯淺が指摘するのは、日本には西洋のキリスト教道徳や中国の儒教道徳に該当するようなはっきりしたかたちの道徳の伝統がないことである。日本人の道徳観念は、宗教の道徳観が法則や規範となる社会と違って、「時代の政治状況に引きずられていく面と習俗の惰性的な力に引きずられていく面の両方があった。」習俗というのは法や規範と違って曖昧であり、社会のマジョリティのものの見方を反映する。その習俗の中に生きていた原始信仰を仏教が取り込んだのであって見れば、仏教が「既存の習俗や道徳観に対して強制的な態度で変革を迫る姿勢をとったことはない」のは当然のことかも知れない。このような仏教の姿勢が家父長制社会における世俗の性道徳をそのまま受け入れてきたということにならないだろうか。

原始仏教に平等思想があったことは疑い得ないし、仏教者がそれを抛り所にすることは理解できるが、その点を強調するだけでは今日の諸問題の解決にはつながらないように思う。むしろ、今日の日本仏教が原始仏教とは違う宗教になっていることを認めるところか

ら、すべては始まるように思う。同時に、なぜ日本では普遍宗教が普遍宗教として成立し得なかったのか、なぜ日本では宗教（仏教だけでなく他の宗教も）が道徳を規範として捉えられなかったのか、を問わなければならない。これらは大きな問題であり、今のわたしにはそれについて論じる力はない。改めて探求すべき課題としたい。

使命感信仰と因縁信仰

勝又 美保

神様、私に変えられないものがあれば、それを受け入れる心を与えてください。変えられるものがあれば、それを変える勇気を与えてください。そして、変えられないものと、変えられるものとを見分ける知恵を与えてください。

クリスチャンの方にとっては、馴染み深い祈りの言葉のひとつではないでしょうか。私は天理教の信者ですが、この詩が大好きで、何かに迷うときには、よく自分の祈りの中でこの言葉を使わせてもらっています。

す。私が、はじめてこの詩に出会ったのは、四、五年前のことですが、その時の私の率直な感想といえば、「キリスト教にも天理教や仏教という『因縁』の思想がないわけでもないのだなあ」というものでした。それまでの私にとって、（今も大して変わりはありませんが）キリスト教のイメージとは、「求めよ、さらば与えられん」という聖書の名文句に顕著のように、何事に対しても、神の使命のために達成されるべきであるという信仰のもと、ただひたすらに前にのみ進んでいくという性格の宗教というものでしたのですが、「変えられないものを受け入れる」というこの発想は、因縁の信仰をもつ天理教や仏教にも共通するものであるなあと私は感じたわけなのです。

28号で池田恵理子さんは、「個人が告発に『向かう／向かわない』メンタリティ」を『キリスト教／仏教』と対比されて語っておられましたが、池田さんのおっしゃるように、私もそういった双方の違いは、ある程度存在するものであると考えています。いささか、粗雑な分類方法ではありますが、キリスト教の人々と私が接する限り、彼ら／彼女らからは、「使命感信仰」的側面が窺えますし、反対に天理教や仏教の方々からは、「因縁信仰」的側面、すなわち、物事を変えるのではなく、現状を受け入れ、むしろ自分の心のあり方を変えていく方法において個々の因縁を受容しようと

する態度が見うけられます。しかし、それらの違いとはあくまでも「傾向」であって、絶対的相違ではないと私は思っています。

宗教とは本質的には、一つの普遍的真理を様々な方法で教えるものであり、そのために複数の異なった諸宗教や教えの諸概念が存在しているものと私は理解します。人間の悪事や苦境を説明する「罪」と「因縁」の二つの概念もそうした性質の下に解されるものではないかと考えます。人間には、生きていく上で、どうしても避けては通れない、受けいれなければならない苦しみがあります。それをどう乗り越えていくか。宗教はそういった絶望の淵にある人間に光を齎すものであるといえるでしょうが、その光の射しかたは千差万別であって、癒しの言葉の表現が違うだけであると思うのです。クリスチャンの人々は、キリストの十字架の受難をかみ締めつつ、自己との「罪」と闘うのです。うし、天理教者は、自分の悪因縁の深さを省み、親神に詫びながら、己の「因縁」と闘うのでしょうか、双方とも、表現方法が違うだけで、苦しみと闘い、それ乗り越えようとする行為自体は変わらないものであると私は考えるのです。

とは言え、池田さんの「仏教の信仰が厚いと為政者には便利」であるという指摘は、因縁の信仰というところで仏教と共通点を持つ天理教の信者である私にとつ

ては、辛辣な批判として受け止めざるを得ません。天理教では、自分に降掛つて来る災難を前生、又は、今生の因縁の結果として受け止め、それを「堪能」の心で「受け入れる」ことが大切であると説かれます。こういった教えは、池田さんが指摘されるように、現実の悪政などにも抗議することなく、自分のおかれた状況をすべてそのまま受け入れてしまうというような、言わば、我慢型、受容型の人間を生み出してしまうことに繋がる可能性を大いに秘めていると思われます。実際、天理教には、自分自身の反省も含めてですが、そのようなタイプの人々が多いと思います。「生かされているだけありがたい」という信仰の喜びは、ある種、どの宗教にも共通することと思いますが、特に天理教の人々は、この言葉をこよなく愛しているように私には思われてなりません。この発想の怖いところは、この言葉を使う人々は、「何に」生かされているのかというところをはっきりさせず、ただ漠然と「生かされている」と考えてしまい、組織や人間までも自分を生かす存在として認め、それらに身を委ねてしまいかねない点にあります。そして、因縁論の更なる恐ろしさとは、内省だけに終わらず、他人の人生についてまで、あまりにも軽はずみに、「あの人は、因縁が悪いから、あんな病気になった」などと、人間の運命の神秘にまで踏み込み、いとも簡単に解釈・判断し

てしまうような発想さえ創出してしまうことにあるといえると思います。

私は、仏教の因縁論を深く勉強しておらず、はっきりと「因縁」の総体について述べることは出来ないのですが、天理教に限って言いますと、本来の「因縁」の教えとは、池田さんや他の多くの宗教研究者の方々が、そして天理教者が一般に上述のように論じる、「受容」ということばで説明しきれない性質のものではないと考えています。「見るも因縁も聞くも因縁」という言葉が天理教にはありますが、これは、他人の因縁こそを、自分の因縁が鏡に映しだされた姿であると思い、そこから、自分の因縁を反省することが大切であるということを示すもので、この因縁理解とは、「受容」というよりは、「闘い」と捉えられるべきものと思うのです。昔の天理教の布教師には、結核の病人を救（たす）けるために、その病人の「因縁」を自己のものとして受け入れようと、病人の痰を飲んだというような壮絶な布教の闘いの歴史までが残されています。私は、仏教のことは深く知りませんが、きっと仏教の因縁観にもこういった単なる「受容」を超えるものが含まれていることと想像します。「因縁」の教えは、本当に理解困難なものであるが故に、誤解も招きやすいものと、自分の宗教を擁護するかのようにですが、私はそう思っています。使命感信仰と因縁信仰：これは、「一神教」

と「一神教のような神を持たない宗教」（代表的な例として、キリスト教と仏教）に対して、私が勝手に名づけた名前ですが、もし、こういう分類が許されるとするならば、この二タイプの宗教は、どちらが良い悪いの問題で片付けられるのではなく、自己に無い（あるいは薄い）部分を時には互いに補い合うことによつて、より多元的・ダイナミックな宗教へと成長して行くのではないかと本当に勝手ながら考え、信じています。

全く、まとまりのない文章で、思うことの半分も書けませんで、お恥ずかしい限りです。ところで、ここで紙面をお借りして、皆様にお伝え致したことがあります。当会の何人かの方々には、お話していたことで、応援頂いてもおりましたので、ご報告させていたのですが、実は、日本の大学院で宗教学を専攻しようという私の夢は破れてしまいました。しかし、合格発表の次の日に、タイの中学校で日本語教師をしないかというお誘いを頂き、導きを感じ？お受け致しました。最低一年、長くて三年の予定で行って参ります。仏教国タイの中にあるカトリックの学校に働く天理教信者という自分でも本当におもしろいなあと思う自分に与えられた環境の中で、フェミニストとして宗教者として、大学院でこそは学ぶチャンスを得られなかった「宗教」を思う存分、肌で学んできたいと思います。

ます。タイにお越しの際はご連絡下さい。

(Address: Regina Coeli School, 166 Chareon Pratek Road,

Chengmai, 50100 Email: katsuamataniho@hotmail.com)

「日本人の性意識に宗教は関係しているのか、いないのか」という問いを、私は立てることができない

井桁 碧

Womanspirit 第28号から30号にわたって、池田恵理子さんと鶴岡瑛さんとの間で展開された議論を受けて、編集担当の方たちから「日本人の性意識にいったい宗教は関係しているのか、いないのか」という問いかけがありました。

「慰安婦」問題に関わってお二人の議論から、私が抽出し得ているのは、大きな枠組みでは仏教・宗教と戦争／戦争責任、またお二人の議論のなかにはことばとして出てきませんでしたが、社会的正義の実現・実践と宗教等々の主題です。これらの主題はどれも、お二人の議論に出会って初めて発見したというのではなく、私が以前から抱えている、そして日本軍によって（従軍慰安婦）とされた女性たちが声をあげられて

以来、まさに〈性〉という視点からの接近が必要だと考えるようになった、格闘し続けている主題なのです。ただし、私にはまだ、お二人の議論をじゅうぶんに咀嚼することができていないので、お二人の議論を受けての問いかけに、私は直接応答することはできません。

しかし、池田さんは、Womanspirit 第28号の「慰安婦」問題から見た日本人と仏教」より以前に、第23号「従軍慰安婦」問題と仏教徒」（一九九七年）に書かれた、「慰安婦」問題を取材していて、この制度を作り出した日本の性風土に仏教がどう関わっているのか」という関心をもたれたというを書かれています。また、こうした問題関心を私は共有しています。また、「慰安婦」問題は戦争責任や民族差別の問題であると同時に、女性への性差別、性暴力の問題である」、「性風土」（私自身は〈風土〉という語を使わず、目下のところ、〈性〉に関する思想・観念および実践の体系、あるいは〈性〉に意味を付与する〈知〉と把握しています）の形成には宗教が深く関わっているという認識と、「女人五障や变成男子の思想をもつ仏教は、日本人の性意識にどのような影響を与えてきたのか」（23号）という問題意識をもっています。そして、大越愛子さんや源淳子さんなど「フェミニストによる仏教研究は「慰安婦」制度を生み出し、戦後半世紀たつてもこの問題を解決できないでいる日本の現状を考える際

に、多くの示唆を与えてくれた」（28号）と考えています。「日本人の性意識にいったい宗教は関係しているのか、いないのか」という問いに対して応答できるのは、ここからです。

しかし、「日本人の性意識にいったい宗教は関係しているのか、いないのか」という問いを、私はたてることができない。世に宗教と称されていると思われる現象で、私が意味あるものとして最初に受けとめたのは〈仏教〉でしたが、ともかく私は人間としての〈私〉を意識し、考え始めたとき、「日本人の〈性〉意識、私の〈性〉意識は宗教との関係」を問う〈主体〉として立ち上がったと言うほかないからです。ところが、私がこの問いに関して何を問題にしているのかは多少は明確にしつつあるとはいえ、ここ数年の間に、〈ジェンダー〉という視点によって事態をより複雑に見なければならぬと考えるようになったこと、〈日本人〉というカテゴリーを簡単には使うべきではないと考えるようになったこともあって、他者に向けて一般化した形で言説化するにはあまりに未整理な思考の段階にとどまっています。そうした理由で、以下に述べるのは、現段階での私にしろうじてできるひとつの試み、「日本人の〈性〉意識、私の〈性〉意識は〈宗教〉とどのような関係にあるのか」という私自身の問題意識の生成の過程を点検し、再構成するという試みです。

「どのような関係にあるのか」という問いのたてかたをすること。そしてその問いに自ら応えようとする。それは、すでに、わたしが〈宗教〉を歴史超越的な真理としてではなく、歴史的な事象として把握しようとする、そうしたアプローチの仕方を選択しているということ。しかも私は人間の営為をへあるがままに全体的に把握できるとは考えないので、ある時代、ある地域、集団的に、また特定の個人において、と多様な水準をそのつど措定しながら、歴史的事態を抽象化、普遍化し、言説化するという作業の仕方を選択しているということです。

このようにいま自分自身を位置づけている私が、仏教と〈日本人〉の〈性意識〉の関係について、考えはじめる大きな契機となったできごとがあります。小学校に入ったか入らないかの年齢で、母に連れられていったどこかのお寺で見た紙芝居です。若いお坊さんを好きになった女の人が、修行しようとするお坊さんを追いかけてゆくうちに、蛇になってしまふ。説明をしてくれたお坊さんは、なんだかむつかしい言葉で、それ自体はわかりませんでした。「女は外側は美しいが内側は恐ろしい」と言っているらしい。また、その僧侶は、「女は執念深い」「女は妬み深く、嫉妬深い」というようなことも言いました。これらの部分は、子どもたちを連れてきていた大人の女たちに言っていた

ので、男の子をふくめた子どもたち向けではなかったと思います。それでも、とてもいやな感じがして、家に帰るまで母の手はしつかり握っていましたが、不機嫌に黙り込んでいました。

このできごとは、私が〈人間・女〉であるという意識を他者との関わりにおいて編成する過程で、さまざまなきごとの記憶や思考をその周辺に引き寄せる結晶の核になっていったようです。そして、おそらくだいたいぶんたつてから、父にきいてみました。母にきいてもよかつたのですが、お寺のお坊さんが言ったことだし、いつも「仏教では」とか、「仏教思想から言う」とか話したがる父にきくことにしたのです。語彙もあまりに不十分で、うまく説明できなかったでしょうが、なんとか察したのでしよう、その僧侶が言った難しいことはたぶん、「外面如菩薩、内心如夜叉」だと教えてくれました。また、お坊さんを追いかけた女の人や蛇になる話は、道明寺という寺の鐘にまつわるもので、多くの人に知られているのだと。

それを知ったからといって、私のいやな感じはおさまったわけではありません。外から見てもきれいで、こころは恐ろしいのは女の人だけか。ねたむのは女の人だけなのか、といった質問をしたと思います。「女だけであるはずがない」と、かえってきた答えはかなり単純でした。父から女であることによって見下され

たと感じることはなかった。しかし、男である父自身が、私の〈性〉そして母の〈性〉についてどう考えているのかを、知りたかったのだと思います。それに對する答えにはなっていました。

けれども、私にはもうひとつの疑問がありました。そして、それは、「女はけがれている」とか、「女は業が深い」とか、「女は救われたい」とか、「女でも救われる」とかいった類の言説に出会ったとき、〈仏教〉ではそう説かれてきたのか、「お釈迦さまは、そう言ったのか」という質問として父に向けられてゆきました。そもそも私が〈おしゃかさま〉という古い時代の人間に惹かれたのは、私が〈差別〉されること、貶められることに非常に過敏で、自分が他者を差別する、貶める人間ではありたくないと痛切に思っていて、〈おしゃかさま〉は「人間の平等」を説いたということにあったからです（差別とか、貶めるということばを獲得したのは後のことで、それまでは、私にとって〈いやなこと〉〈だいきらいなこと〉としか表現できませんでしたが）。かえってきた答えを要約すれば、お経のなかには、そういうことが書かれたものがあるということ。そして、經典は釈尊自身が書いたものではなく、釈尊が亡くなってから弟子たちによって書かれたのだということ。これには、困惑しましたが、絶対の真理がそのまま文字になったものとして、信じていれば間

違ひなくだいじようぶといったものとして、教典があるのではない、と受けとめていったと思います。自分で考えてゆくしかないのだと。まだ自分自身で哲学的あるいは佛教関係の本を読み、思考することができるようになる前のことです。

〈私〉という意識に気づいたとき、それはすでに外部世界に対する不安、違和感とともにありました。その不安や違和感は、それをどうしたらいいのかまったくわからなかったけれども、母と父が語った生の物語のなかから伝わってきたもの、国家の軍隊がする戦争、人が人を殺すということ、ときとして女という〈性〉が恐ろしい攻撃の対象になるということ（具体的にわかったわけではありません。きわめて漠然とした、しかし予感せざるを得ない恐怖でした）、貧困や民族を根拠に人間が人間を差別すること、そして敗戦後間もない東京で私自身が見たこと、〈戦争孤児〉〈浮浪児〉と呼ばれた子どもたちの姿と深く関わっていることはわかっていました。そうした私のことばと思考の環境は、哲学としての〈仏教〉、つまり近代主義的な視座から〈仏教〉を思考していた父によって規定されるものとしてあり、いまだ名づけることのできない不安、違和感、苦からの解放を希求する主体として私は〈私〉を意識していったと思います。しかもその希求は、父

によつて私に語られた釈尊のイメージ、実体論的思考をとることなく、世界・人間を徹底して認識することを通して〈苦〉からの解放を成就した人間としての釈尊というイメージに困つていたのだと思います。

私は、〈私〉が何であるのかを知りたい、そうした欲望の主体として立ち上がった。そして、その欲望は、外部世界に対する強い違和感のゆえに、そして〈性〉によつて貶められることを忌避するがゆえに、〈性〉を無視することによつて超越しようとして、現実の社会とはできるかぎり接触をもたない方向で、その欲望を満たそうとしました。しかし、そうした営みのなかで、いまでも歯がみしたくなるほどの時間をかけて、〈私〉の歴史性ということ、過去の人間たちの行為の結果との関わりにおいて〈私〉があること、したがつて私の欲望は社会の歴史、現実態についての知、それらを分析する知の技法を知り、会得する必要があるのだと気づかねばなりませんでした。そのときすでに二〇代の半ば。それから三〇年、〈仏教〉を研究の対象とする広義の宗教学を選択し、さらに歴史的に展開してきた〈宗教〉を組織化された教典・經典に書かれた教義や教団・教会組織、また一般には宗教とはみなされていない人間の文化的社会的営為を観察し、そこから人間と人間との関係を規範化する認識、思考の枠組みあるいは文法とでも呼ぶべきものを指定するという

方法をとるに至っています。

ほんとうに、うんざりするほど遅々とした歩み、足取りですが、この過程で、新宗教が女性たちに提示した信仰とその実践のありようを、〈妻・母〉としての〈性〉意識への覚醒 (consciousness raising) の問題として論じました。また、部落差別にも関わる問題として宗教的な意味をおびた〈けがれ・穢れ〉についても考察を加えています。そして、一〇年ほど前に、ある仏教団体が設けている人権問題を議論する場に参加する機会を得て以来、その教団ばかりでなく他の教団の僧侶 (ほとんどは男性僧侶です) の方たちとも出会い、さまざまな〈差別問題〉について問われ、問い返す、それらを私自身の思考の資とするという作業を継続し、日本人の〈性〉意識そして、日本人の宗教・仏教との関わり方に関する自らの問題意識を析出してきました。

ここで「日本人の宗教・仏教との関わり方」と書きました。近年、それをあらためて問いとしてたてているのは、日本人であることを疑っていないように思われる日本人の多くは、自分の家族や自分が死んだら仏教式のお葬式をするとしても、〈仏教徒〉であるという自覚をもつてはいないと考えざるを得ないからです。また〈仏教徒〉であるという自覚を持たない多く

の「日本人」は、僧侶たちによる言説は「仏教」だと受けとめる傾向がある、そして僧侶自身も僧侶である自分が語ることが「仏教」だと信じ込んでいるのではないかと思うからです。それに、私が知り得た範囲では、現代日本社会の男性僧侶たち、そして仏教学者たち、少なくとも自分たちを仏教徒とみなしている彼らが、經典の語句や文章に依拠して「説教」は語るとしても、彼らの多くが、必ずしも現代に生きている人間としての自らの生と性の実践を、經典や宗祖の教えに對峙させてはいないと考えざるを得ないからです。いや、こう言っただけでは不十分で、「さとり」の境地からいっさいの「差別」はないと断定的に對峙した結果が、と言うべきなのでしょうが、次のような言説化がなされることが少なくないことに異議を申し立てたいと考えているからです。

たとえば、華嚴学を専門とする仏教学者である蒲田茂雄さんは『観音の道』（工作社、一九八〇年）で、中国そして日本で現在まで信仰の対象となってきた観世音菩薩、観音について、『観音經』の一節「若し衆生有りて、淫欲多からんに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬愛せば、すなわち欲を離れることを得ん」を引き、「これは観音を念じることによつて性欲を淨化して、慈悲のこころにかえることを説いているのだ」と

書いています。そして、こう述べている。「男女の愛欲のしがらみは業といつてよい。業が深い女とよくいわれるが、まさに男女相会するのも業による。自分の意志ではいかんともすることができない大いなる運命の業としかいいようがない。夫婦であってもそうである。因縁所生によつて夫婦としての和合と、互いの葛藤を通じて人間は成長してゆく」。

また、武士から禅者に転じた鈴木正三（一五七九～一六六五年）の著書『盲安杖』が「女の性について説」いているとして、「もとより女の性はひがめなり、貧欲甚だしく、人我の相ふかく、迷ひの方へひかれて是非をしらず。口は利根にして心あさし。かれにしたがふ時は輪廻の業となり、そむく時は敵となる。とにかくにもつたなきものと知て、おそれつつしみてまどふ事なかれ。かくいふとて女を捨てよにはあらず。色に着して恥をあらはす事なかれとなり。女人は是諸仏の母、全くそしるべからず。我がひがごとを改むべし」を引用し、自説を述べてゆきます。

まず「女の性はひがめなり」について「ひがむ」とは、「先人觀に支配されて事実をまげてとることである」、そして「貧りのところが強く」、また「人我の相ふかく」とは「自分本位でものごとを考へること」だと説明を加える。そして「夫婦喧嘩をした時、男は沈黙するしか手がないのはこれによる。子宮でものを考へると、

頭でものを考える相違かも知れない」と。そして、正三に追従しての議論ですから当然でしょうが、「女の性がどうにも救われない業を背負っているが、だからといって女を捨ててはならない。捨ててはならぬどころか」「女人は仏母」であり、「いかなる天才、偉人であらうとも皆母から生まれたものである。男は子供を生むことができない。女のみがいつさいの男子女子を生むことができるのだ」と。

日本仏教は非仏教であるという説もありますが、仏教用語がちりばめてあるこうした言説、これを〈仏教〉と呼ぶべきでしょうか。自〈性〉のありようを相対化することなく、自らの〈性〉の欲望を他者に、他〈性〉に投影し、男・自己中心的な性の遂行を賛美することは、仏教の起源にあった思想的立場とは異なると、私は考えます。しかし、日本仏教を非仏教と名づける一方で、どこかに実体的な真の仏教が存在するという考え方をではなく、現代の人間である私は、日本社会に構造化された差別からの解放を希求する主体として、この列島において展開してきた事態、実際に個々の僧侶が、あるいは僧侶たちの説教に直接、間接に触れた人びとの行為の堆積を、〈日本の仏教〉として把握する必要がありますという考え方を選択します。（＊蒲田さんの論考については、仏教の歴史に表出する「男性の性に対する欲望」を主題化した、門馬幸夫さんによる

「〈救済する身体〉と〈欲望される身体〉」（『宗教と社会生活の諸相』隆文館、一九九八年）に詳しい分析があります）

蒲田さんの論述の仕方を、〈仏教〉が日本人の〈性〉意識に関わってどのように遂行されてきたのかを示す典型、と私はみなしますが、ここで最後に、いずれ精緻に分析しなければと思いつつ頓挫しているあるテキストに触れておくことにします。田上太秀さんの『仏教と性差別 インド原典が語る』（東書選書、一九九二年）です。「仏教経典の中の様々な表現をとり上げ、インド仏教、とりわけ大乘仏教における女性差別の問題を考える」と帯にうたわれているように、この本を読むと、どのような仏典に〈女性差別〉思想、言説が書かれているか概観することができるので、私もしばしば参照しているテキストです。そしてしかも、読み返すたびに、「最初に打ち明ければならないことがある」と書き出されたこのテキストの序文に、ため息が出るテキストです。

「私は数年前までは仏教の仏典のなかに本書で紹介するほどの数の性差別の例があるとは思っていませんでしたし、そんなものはないと信じていた」と述べられていることに。そしてさらに「大学で多くの先生たちに仏教を学び、教えを受けてきたが、そのなかで一

度も性差別についての講義、あるいはそれに少しでも触れるような内容の講義を聴いたことがなかったから。したがって大学院で研究しているときも、また終了後も、仏教研究を続けてきたなかで、性差別についての文章や語句を經典のなかに意識して読むことはなかった。ひたすらライフワークとして掲げたテーマである菩提心の研究に没頭してきたので、変成男子説や女人五障説には無関心であったというより、無知であった」と続けられていることに。

もっとも田上さんは、「無知」のままに、「無関心」のままにとどまっていたのではなく、『婦人公論』に掲載された「仏教の女性差別に挑む寺の女たち」という記事（一九八九年、五月号）を読んで、性差別に関心をもち『仏教と性差別』としてまとめられたわけです。そして、このテキストの結論の一部は、「仏教の性差別は仏教本来の思想にあったのではなく、これを伝えた男性の心にあったことを知らなければならぬ。そして仏教を差別の宗教であるかのようにした責任はすべて男僧たちにあった」という主張に示されていると言えるでしょう。

これで、ため息はつかないですむでしょうか？しかし「本来の仏教」？田上さんのいう「本来の仏教」とは、『スツタニパータ』に説かれている「釈尊の平等思想」です。人類以外の「他の動物には生まれにもとづく特

徴があり、それぞれ区別を認めることができるが、人類には生まれにもとづく特徴はない。したがって人として生まれたときから階級や職業において差別されるいわれはない」と釈尊は述べていると、「釈尊の平等観は人の種として生まれたものに差別はないという考え方である」と田上さんは述べています。

「差別されるいわれはない」「差別はない」という言説は、どこからなされているのでしょうか。田上さんは、パーリー語仏典を紹介しつつ、「人にはいろいろな種類がある」、それは「たとえていうと、青・赤・黄・白、さまざまな蓮の池があつて、水中に生え、水中に育つて、水の表面に出ない蓮もあれば、水面にとどまる蓮もあり、水面を離れて、水に濡れない蓮もあるようなもの」で、「この差別のうえに、さらにまた、男女の区別があるが、しかし人の本性に差別があるのではない。男が道を修めて悟りを得るように、女もまた道を修めれば、然るべき心の道筋を経て、悟りに至るであろう」と教えているとしています。

ここで、私が問題にしなければならないのは次のような叙述の仕方です。「人間の社会に階級制度があるのは、人の現象面、形象面だけに執着して好き嫌いの感情で判断したり、人為的な尺度を当てはめて、差別したものである。色が黒いというだけで差別される。貧しいというだけで差別される。汚れ仕事をしている

というだけで差別される。いわれのない言い伝えで差別される。学歴の有無で差別される。これに対して釈尊は、本来、人として生まれたものにこのような差別はないと教えた」。

「差別はない」？〈差別〉は自然現象ではなく、人間がする行為つまり〈差別〉は、それを行為として遂行する〈主体〉の問題である。そう認識するべきであり、人間を何らかの理由をもって〈差別〉するという行為は、人間として為すべき行為ではない。釈尊はそう説いているのではないか。田上さんも、釈尊の時代にすでに〈差別〉が構造化されてあったこと、だからこそ「平等」が説かれたと知っているのではないか。「人間は、平等である」と認識する立場を選択するなら、現実には平等でないこの社会の人間関係のありように対して、平等を志向して行為しなければならぬ、私はそう考えます。

ひとつの〈思想〉が説き出されるとき、その社会的文脈と無関係であるはずはない。しかし、結果として普遍性をもち一つの社会、民族を越えて受け入れられた宗教は、特定の社会のある時代状況の限界を根元的に超越すべく説かれ、実践されたがゆえに、そうした性格をもつ〈仏教〉について学び、仏教用語を習得した人間がしばしば、自分があたかも、人間的な限界の

すべてをすでに超越してしまったものの位置にいるかのように語ってきたのではないか。〈仏教〉あるいは釈尊のさとの視座として把握されてきた、人間的な限界を超越したかのような立場からする言説は、現実にはこの世界の差別構造を〈あるがまま〉でよいのだとして容認し、そのなかで苦しむ人間の苦しみを否認することになる。

性意識と宗教

——中絶に対する見方の変遷から

小松加代子

性意識の形成に宗教がどのように関わってきたのか、という大きな問題に直接答えるだけの研究成果を残念ながら持っていないので、ここでは私が水子供養を調べていた中で考えたことを少々まとめてみたい。

死んだ水子の霊を鎮めるための水子供養の広がりは一九六〇年代以降であることは周知のことであり、その問題は多くの人から批判されてきている。その中で、いったい宗教はどのような役割を果たしたのか、現在も果たしているのか、ということについては、どうも

曖昧のままであるように思う。とりわけ、水子供養の始まりにおいて、宗教団体あるいは宗教思想が、水子供養をどう位置づけ、どう解釈するかについて、積極的に関わったかどうかについては、はっきりしていない。このことは、日本における人工妊娠中絶の是非の議論においても同様である。

日本では、一九四八年に制定された優生保護法で中絶が合法化されたが、その際、国として人口を減少させる政策をとる必要があったと言われる。さらに一九四九年には「経済的理由」が加えられて、いっそう中絶が容易なものとなったが、こうした中絶のある意味での合法化の過程で、キリスト教文化が深く根付いたヨーロッパ諸国と異なり、日本では反対する宗教団体はなかった。ところが、一九六〇年代後半以降に水子供養が始まると一気に流行となつて広まっていく。国としての政策に迎合する形でしか、中絶に関する宗教界の、とりわけ仏教・新宗教界の反応は現れていない。

一九七〇年代以降に登場した「経済的理由」の削除を求める中絶合法化反対運動の中でも、一部宗教団体の働きかけがあったものの、世論を揺り動かすほどにはならなかった。しかし、水子供養は徐々に確実に浸透していく。一九六〇年代の雑誌記事を調査した研究では、胎児の供養が、胎児の遺体を取り扱う業種の会

社から始まって、次第に必要に駆られて供養が定着していく様子を描いている。胞衣会社が病院から引きとる胎児の遺体を火葬して、そこに骨を納める儀式が一九五〇年代後半に始まる。雑誌記事は次第に中絶された胎児がどのように扱われ、捨てられるのかに関心を向け、その残酷さを描き出すと同時に供養の必要性を呼び起こす方向に進んでいった。そこに登場する寺の住職も「無残に処理される胎児と、悲しむ女性」の存在に注目していることを語るのみので、宗教的なコメントを寄せるわけでもない。

斎藤美奈子は『妊娠小説』で、世界家族計画会議で日本の中絶による人口減少を欧米諸国から非難されたことと、皇太子出産のニュースにより中絶糾弾と出産美化の報道が増え、中絶＝殺人という等式が既定事実とされる風潮が始まったとしているが、それ以前に人口問題を抜きにして、宗教界での中絶反対の意見はあったのだろうか。

同様のことは、一八世紀にも起こっている。いずれも中絶に関する事柄は、日本では人口政策がもつぱらの動機となっており、宗教思想はその後追いにすぎない。それまで、人口調節として認められていた間引きや堕胎は、一八世紀後半以降、人口増加を図る藩を中心に堕胎・間引き対策が講じられていく。このときに、宗教界がこぞって藩の政策の推進に関わっていったと

いう。落合恵美子は次のように述べている。「興味深いのは、仏教、儒学、国学、医学、農学など宗教的・思想的立場の違いにもかかわらず、宗教者も俗人も、同時期に同じ方向、すなわち墮胎・間引き批判の方向へと傾斜し、前述のように当時の知識人たちは異口同音にそうした「言説」を発した。墮胎・間引きへの態度を決定させたのは各々の教義や思想体系ではない。それぞれの体系の中の適切な部分を時代が活性化させたかのごとく、各種の思想はそれぞれの思想体系の中から墮胎・間引き批判の理論を紡ぎ出していった。」(『エンダーの日本史』pp.446-447)

その宗教思想から墮胎や間引きを解釈し、それに併せた言動を広めたというよりは、国の人口政策の動きにあわせて、その時々に関心を展開してきた日本の宗教界のありさまがここには見られるのである。

それでは、その中で墮胎・中絶に直接関わった女性たちの苦しみを誰が癒したのかという疑問が浮かんでくる。それを考えるとき、「流れ灌頂」の慣習に興味を引かれる(小野泰博「流れ灌頂から水子供養へ」『伝統と現代』1983.75)。小野は、茨城県に残っていた「流れ灌頂」を見聞きし、そこに現代社会が失っていた、共同体の供養の形を見る。「流れ灌頂というのは、お産のときなくなった女性を供養するためのものである。このあたりでは、新しい白いさらしを四角い風呂

敷のように拡げて四方を竹でささえ、これを小川のほとりにかけ、その広げたさらしの中のくぼみに、死者の生前の持ち物であった櫛やピンなどを入れておく。これをさらに横長に長方形の塔婆を寺で書いてもらって立てておく。こうして同じ産の苦しみを体験しなければならぬ婦人たちは、人ごととは思わず、遠くをいとわずお参りに来てくれる。どこの誰とも名のらずに万人によつて供養されることで成仏できるという。」そして、近くの寺院で流れ灌頂作法を書き記したものを掲げるのだが、それは、この慣習に合わせて寺院側でとえのるようになったものではないだろうか、とまとめている。

出産における死は、女性にとって人ごとではなく、近くに出産で死んだ女性がいれば、供養に出かける。女性どおしのつながりが、狭い村を越えて地域に広がっていたことがうかがえる。また、そうして供養することが、自分自身のお産を楽にするという功德に変わるという救いのある儀礼になっていることは、つらい状況にある女性どおしのつながりが唯一の癒しの場であったのだろうと考えられる。これに対して寺院ができることは、塔婆を書くことくらいであっただろう。女性どおしのつながり、共同体のつながりが弱くなつていく都市化の流れの中で、そうした儀礼の主導権を握りだしたのが宗教団体だったということができ

る。それが水子供養の流行でもあった。

宗教が性意識を形成したのかという問いからはかなり離れた形でしかない雑な議論ではあるのだが、こうして考えてみると、日本において宗教が主導権をとって、人間の性や生に関わる主張をしてきたことが、いつたいあったのだろうかと思わざるを得ない。性意識の形成に関わった宗教という存在に思い至っていない現在の私の個人的な思いをまとめてみた。

失われた輝きを求めて

小澤 治慧

今回のテーマにつき考えていくに当たり、大越愛子さん、源淳子さんたちの仏教批判を想起してみたい。

「日本の差別風土を根底で支えているのが、仏教により形成された性暴力パラダイムである」という説である。彼女たちが「穢れを負った女性が男性の性的欲望を満たすことで聖なる存在へと昇華されていくというメカニズム」を導き出す場合、参考にされているのは日本仏教の中の浄土教である。その中でも親鸞に係した文献、特に「女犯の夢告」が引用されている。

この女犯偈に象徴される親鸞の仏道修行の姿勢は彼に宗教的世界の深まりをもたらし、恵信尼との歩みへとつながっていく。しかし、「女犯」という形でその宗教的到達点が表現されたことにより、「男から犯される存在」という対等でない男女の関係がその時点からひとり歩きを始めてしまう。

それに対し、日蓮は「無我の比丘」との自己規定にたち、「法華経の信」を破るべからずということが彼にとつての戒であったから、男女の交わりを悪とみなすことはなく、セクシュアリティに対する大らかな考えを持っていた。

「それ、信心と申すは別にはこれなく候。妻のをとこ（夫）をおしむが如く、をとこの妻に命をすつるが如く、……略……法華経・釈迦・多宝・十方の諸仏菩薩・諸天善神等に信を入れ奉りて、南無妙法蓮華経と唱へたてまつるを信心とは申し候也。」この手紙にみるように、夫婦間の愛情の中に信心があるのだと説いている。

日蓮の女性観の中で特筆すべきなのは、「月水御書」と呼ばれる手紙で、中世社会に於ける女性蔑視の根底にあった血縁観をはっきり否定していることである。また「日蓮法華経より外の一切経をみ候には、女人とはなりたくも候はず」と記し、さまざまな仏教經典の差別的な女性観を厳しく批判してもいる。俗世間の規範に縛られず、女性を人間的に対等な存在と考えている

仏教者日蓮がそこにはいる。

次に、手紙を基に日蓮と信徒の女性たちの交流を紹介してみたい。

中世社会に流布していた五障三従の存在としての女性という女性観について、何人もの女性が問いを發している。千日尼から「罪深い女性の身でも仏になれるでしょうか」と問われた日蓮は、「法華經こそ女人成仏の手本」として、その身のままで法華經の經力により成仏した龍女のことを語って聞かせる。「法華經を信じる身であるから罪は消え、深い慈しみの心をもつ存在となった」という日蓮からの手紙に接し、どれほどの歓びが彼女たちの心に沸き起こったことか。

日蓮自身、時代の子としての制約があることは確かで、手紙には今なら差別的な女性観といわれかねない表現も登場してくる。後世の男性僧侶は自分たちに都合の良い、そうした部分のみ取り出し、さも日蓮の教えのごとお説教をしたがる。しかし、手紙を良く読めば、日蓮の真意はそんな所にはなく、女性の尊厳を信仰の力により引き出し、自らの足で歩くことの大切さを示唆するのが本旨ということに気付くに違いない。

女性の遭遇するさまざまな人生上のステージに対し深い理解を示し、適切なアドバイスと激励の言葉を記した手紙の数々、信仰の根本はどんな困難があっても貫き通すよう諭しながらも、複雑な人間関係や事態に

配慮した行動を提示している手紙、心の深い処をさし貫く透明な信仰の形が書かれた手紙等々。このような日蓮からの手紙を手にした当時の女性たちの思いが現代女性である私の内に流れ込み、思わず感動の涙が溢れることもあった。

男性に従い、自分を二の次にしてと良妻賢母としての生き方を押しつけられていた女性たちに日蓮は「どんな男を夫としても法華經の敵ならば従ってはならない」と書いている。

では、夫が法華經の信者ならば女は男に従わなければならないのかと言う人が出てくるだろうが、それについては、夫婦それぞれのあり方により異なった手紙が届けられている。

例えば、佐渡の千日尼の夫（老齡にもかかわらず三度めの身延参詣を果たした）に託した手紙の中で「夫は羽、妻は羽を動かす身というべき」として、千日尼の力を称えている。彼女は夫の死後も、日蓮の門弟とともに布教に力を尽くしていく。家庭内宗教戦争とも言える危機的状況が何回か訪れた池上家兄弟の妻たちに送った手紙をみよう。そこでは信心深い夫たちの言いなりになるだけでなく、「夫にたゆむ心があれば夫を諫めよ」と述べ、法華經への信心により、男女が互いを高め合う形の人生を歩むように説いている。

以上みてきたように等身大の女性に対し、真摯に、

あるいは熱い思いを込めて法を説くのが仏教者としての日蓮であった。彼は俗世間の差別的な女性観を否定し、法華経信仰により人間的尊厳に立つ生き方を実現していくことを「女人成仏」という形で示したといえよう。

このような女性に対する曇りないまなざしを生み出したものが日蓮の「法華経の信」に基づく宗教的実践であった。

その生涯をみていくと、仏教者としての歩みの節々で生き生きとした女性たちとの交流があった。鎌倉での迫害に多くの信者が彼のもとから去っていった時でも、法華経信仰を棄てなかつた女性たち、人目を忍んで佐渡流罪の身である日蓮に食糧、衣服を届ける女性、身延に籠った日蓮に供養の品を送り支え続けた女性たち、教えを求め、千里の道を踏み分け幼子と二人危険な旅の末、日蓮を訪れた女性等々。彼女たちの中には、生活者としての確かな智慧と日蓮と信仰に対する切実な思いが育っていたに違いない。念仏信仰が社会全体を覆う中で、権力者に真つ向から挑む僧として迫害された、日蓮に身を寄せることが当時の女性にとってどれほど大変だったかを思うとき、信仰の力が人間を深い処で支えることに気付かされる。

鎌倉時代という大変革期の中で生まれてきた日蓮教学のもつ草創期の生命力と社会的影響力もその後の教団の歴史の中で変質を余儀なくさせられていく。長い

檀家制度のもとで、僧侶たちは支配者の忠実な下僕の役割に甘んじ、そのことを自覚することすらないまま、世俗社会の差別的な女性観を寺にくる女性たちに「教え」と称して説いて来た。

寺に生活する女性たちの抱える問題に何ら向き合うことなく教えを説く僧侶に対し、当事者である女性たちからは、次のような形で根本的疑問が提出されている。

「一人の女性が伝統的教団の中で生きていくために自分を殺さなければならぬとしたら、寺院、僧侶、そして仏教は一体誰のためにあるのだろうか。果たしてこのような仏教で私は、そして人間は救われるのだろうか」

葬式仏教の担い手となった一人ひとりの僧侶にこのような女性の声が届くかというとはなはだ心許ない。かつて大嘗祭に当たり、一連の国の動きに危機感をもつ何人かの僧侶がある県の寺院に呼びかけ調査したことがあった。それに加わった私の友人である尼僧がその後、赤のレッテルを貼られ批難をあげたというのが僧侶社会の現実であるからだ。

それにもかかわらず、現代女性の一人として、自分たちが置かれた状況を仏眼を借りて（至難の技ではあるが）認識し、自らの生き方を問うという形で仏教と向き合っていくことが成仏へと至る道であると考えた

い。

一般社会より閉鎖的かつ封建的だといわれる寺社会の現実に対峙して、仏教に変革のエネルギーを蘇らせていくには、女性たち一人ひとりが率直に、自分の言葉で語り、動き始めることこそ大切なものではなからうか。

一番星の性は

山下 暁子

一、二つの詩

小さいころ／あんたはだれって／きかれたわ／ママから教わったとおり／アメリカ人よとこたえてたわ／チン・チン・チャイナマン／ジャップね あんた／はらわたが煮えくりかえったわ／で家へかえると／ママはいつもこういったわ／気にしない 気にしない／ひとりの方が／はやく歩けると（後略）

ジョアン・ノブコ・ミヤモト
「日系アメリカ・カナダ詩集」

この詩は「日系アメリカ・カナダ詩集」⁽¹⁾から。

アンソロジーを読むと、普通は男性の名前ばかりな

ので、その陰で洗濯に励んでいた女性を思い、怒りを感じてしまうことが多い。勿論古いものなら、古いほど。たとえば一九七六年の日本の詩歌二七巻の「現代詩集」は三九人対六人。この比率は多いみたいだが、この詩歌集の二五巻までの個人集には与謝野晶子が四人集のひとりとして載っているだけで、あとは二五巻、全部、全部、ほんとに男の名前だけ。九〇年の「日本の詩一〇一年」だと人数で、九一人対一〇人。では、短歌だと女性が多いかと思うと「日本名歌集成」⁽²⁾での近・現代編でも、二〇八対四一人。

しかし、一九八五年出版で第二次世界大戦下の収容所経験が中心に書かれている「日系アメリカ・カナダ詩集」は女性詩人のほうが多かった。で、突然思ってしまう。日本にはフェミニズムが根づかなかったのか、このまま嫌われ続けるのか、それともこれから、の可能性もあるのか。あつて欲しいけど。北原みのり、頑張れ！⁽³⁾この本でもう一つ好きだったのは、「後書き」にこのように日系作品を集めることに対し、ニューヨークで日系の女性が「なぜ日系なの？なぜアジア系ではないの」と「きびしく質問してきた」ことが書かれていること。女性だから言っただけ……っていうのは、私の偏向かな？

性意識について例会の報告を書くのに、この詩で始めたのは私がいつも詩を読んでいるという自分勝手な

理由（すみません）からだ、文学が男に独占されてきたということは、性意識にも大問題だ。

一月の例会で石塚友子さんは「長く纏足に身体の自由を奪われてきた台湾漢民族の女にとって『纏足をはずし自分の足でしっかりと立てるようになった』ということは『自分の身体を取り戻す』ことのみならず『自分の人生を取り戻す』ことであつた』と言われた。

七〇年代に書かれたミヤモトの詩では、女の子は「はらわたが煮えくりかえって」も、ママに励まされて「ひとりではやくあるく」。大変だけど。

しかし、女性の身体はこの二〇〇一年になつても、「見られる」形で堂々と新聞の第一面に書かれている。二月九日の「折々のうた」（朝日新聞）。

大岡進は、「女子フィギュアの丸きおしりをみてありてしばしばほのぼのと灯れり夫は——馬場あき子」という短歌について、次のように書いている。「うたわれている情景にはだれでも見覚えがあるう。TVの画面で多くの男性が眺めるのを楽しみにしているもの、そしてそれを口に出して言うのは何となく抑えているもの。この歌がさすが巧者の作と思わせるのは、下句で『ほのぼのと灯れり夫は』と、上句の直接性を柔らかに受けとめ、いささかも冷笑的ではなく、夫の世界に自分も自然に融けこんでいる快さ」

は（（（（（ため息）フィギュア・スケーターはど

う受け止めるだろうか。水泳の奥野史子さんは「現役時代、シンクロを見る男性の目が非常に気になり、嫌だった」と述べている。⁵強姦の裁判を楽しみに傍聴に行く男達のグループがあると聞く。行動の清潔感の無さからか、読んだ途端に思い出したのはそのことだった。伊藤ひろみやエリカ・ジョングが自分のおしりを歌うのとは、マリリン・フレンチが小説で書くのとは、違う。個人的に楽しむのはその人の人間性だが、新聞という公的な場所にそういう視点を持ち出したことはセクハラだ。多くのスポーツでそういう見方をする人々がいることは現実だが、練習を重ねた選手と競技へのそういう見方はセクハラであり公的な場所で口にするのは、犯罪だ。「ほのぼの、快い」という言葉を讀むと、作者、評者、共にそういう視点が全然無いのだろう。バレエも昔は演技より女性の身体を楽しんだという歴史があるそうだが、恥ずべき歴史のはずだ。スポーツ分野のセクハラがヨーロッパで問題視されていることは「スポーツに女性の新風——五輪選手やOGやコーチ動く」という日経の記事で読んだことがある。欧州評議会のスポーツ委員会がこの問題の倫理的指針と行動綱領を提案すると書かれていた。⁶

二、二つの例会から——大嶋果織さん

二一世紀になつてもこんな視点が平然と横行してい

る女性の身体。この号のテーマは、「日本人の性意識にいったい宗教は関係しているのか」ということだが、私は、最近二回の例会のことを書く。興味深かったし、女性の身体、性意識につながっていたからだ。ただ、録音テープではなく、私のノートからなので文責は私にある。

昨年九月の大嶋果織さんと、今年一月の石塚友子さん。

大嶋さんの「性とからだについて肯定的メッセージを教会が発信していくことが、女性の性の自立にとって大切なことでは」は、女性と教会の関係の希望を感じさせてくれる言葉だ。教育に携わり、牧師でもある大嶋さんは「胎児・女性・宗教権力」と題されて「キリスト教界内の中絶・生殖医療に関する声明文、決議文などを女性の立場から読み直す」と話された。フェミニズム・宗教・平和の会でも「自己決定権について考える」というシンポジウムが一冊になっていて、それにも触れられた。レジメにはキリスト教の公式、一般出版物が数多くあげられていたが、カトリックの本で「女性が安易に中絶する」や「女性たちが、人類史上かつてない規模で、群れをなして我が子を葬り去る」と書かれているものがあつた。⁷ 私自身、カトリック信者として書かれたものに違和感を感じたことは沢山あつたが、今までは自分の感じ方を信じられなかつ

たから、発言してこなかつた。突き詰めずに生きてきたことが恥ずかしい。

大嶋さんは宗教の力を「私は教会のなかで、人間として生き生きと生きるエネルギーをもらったし、『基本的信頼感』みたいなものも与えられていた」とあるインタビューで⁸言われている。宗教の力については、奥田暁子も「人間を超える存在を信じるとき、人はどんなときにも絶望してしまわず、未来に希望を持つことが出来るように思う。実際、宗教が困難の中にある人びとを奮い立たせた例は多い。奴隷制廃止運動や公民権運動に参加した黒人たちの原動力になったのはイエスの言葉と黒人の共同体である教会であつたことはよく知られている」と書いている。⁹

大嶋さんは、中絶、妊娠などに、女性の視点と激しい言葉（それがいいんです）で切り込まれた。中絶について、その人の全存在を賭けての決断なので、可否、善悪を問う問題ではない、と。また、「からだで読む聖書」と、「実感で読む」「自分の目で読む」というよりもっと身体的な読み方を提言された。

三、石塚さんの台湾と日本

今年一月の石塚友子さんの例会のタイトルは、「一九二〇年代における台湾の女性運動から見た、日本の女性たち」。ジャーナリストの石塚さんは台湾と日本

で同時期に生まれ、封建制度下の植民地と被差別部落という階級と女性という、二重の差別に立ち向かった若い女性たちについて話された。「どのマイノリティ運動にも通じるフェミニズムを作り出そうとこの二〇年思っている」と。

今の台湾の政治事情、皆さんご存じですか？ごめんなさい、私は知りませんでした。

台湾で二〇〇〇年三月、政権をとった民新党の副総裁呂秀蓮さんは戒厳令下の一九七〇年代に高級官僚を辞して女性解放運動をし、八〇年代には逮捕された女性であり、総裁はその時の弁護士だったそうさ。このような今の台湾の政治状況から、日本の植民地であった時代に遡り、それから漢民族の一〇〇〇年の伝統の纏足のこと。

石塚さんの話で、私が、わくわくしてしまったのは「運動会」という言葉。私はつい最近までスポーツが大嫌いだったし、学校の「運動会」は死ぬほどこいやだった。最近、自分の体力作りの為の運動が好きになったが。だから、台湾で初めての女性解放運動の団体が「運動会」を活動計画のひとつにあげたことがすごく面白かった。その「彰化婦人共励会」は一九二五年に台中に近い古い城下町で、彰化高等女学校の卒業生を中心に結成された。一九〇七年生まれの女性が一七、八歳になった頃であり、この一九〇七年生まれの台湾漢民

族の女性は、初めて纏足から解放され、初めて近代中等教育を受けた世代だそうさ。講演会、バザーなどの活動計画六項目の一つに「運動会」をあげ、「体力の向上、スポーツの楽しさ」を求めたという。言葉は意味を与えられると再び輝く。石塚さんのお話によって私の中で「運動会」という言葉は、何と楽しい気持ちを与える言葉となってくれただろう。

「彰化婦人共励会」が主催した講演会は、儒教道德が強い台湾で女性が講演するのは珍しかったせいもあって、二回の講演会で五〇〇〇人も集めた。しかし、この会は、「多角恋愛事件」という妻帯者の社会運動家との集団駆け落ち事件というスキャンダルによって翌二六年に、たった一年間の短い活動を閉じなければならなかった。女性が第二の性でいて欲しい人々にはぴったりのこの結末。さんねん。しかし、石塚さんは、この集団駆け落ち事件を「女性解放が目への現実社会で制度的・道徳的に困難な場合、その息苦しさからの突破口としたと理解できる」と言われた。つまり、社会的にマイナーな運動をするという困難に押しつぶされそうになった時、恋愛という手段をとってしまったということ。飛躍すぎだが、今回これを書いていて、私も自分が思いがけない苦境に陥った時（この女性達とは比べ物にならない、私的な小さいことだったが）あとで考えると、一体どうしてあんなことしたのかと

後悔することを沢山したが、でもそれも苦しさの表現だったのだと、苦い思い出を自分で許す気になった。そして、石塚さんが言われたように、若い頃の出来事は確かに恋愛愛的な表現をとっていた、ということにも思いあたった。

石塚さんのお話は、その台湾の女性たちと「同時代を生き、運動した」女性として日本の高橋くら子に続く。高橋くら子は一九〇七年に長野県の被差別部落で生まれ、村から初めて町立小諸女学校に進学した。卒業も二番の総代という優秀な学生だったが在学中は生徒全員による無視という屈辱を受け、総代として受け取った卒業証書もだれひとり受け取ろうとしなかった、と。在学中から長野県水平社ただ一人の女性弁士として活躍した。卒業式の一月後、「長野県水平社の女性弁士の失踪」と新聞に書きたてられる事件を起こす。自称大学生と同棲し、社会だけでなく、両親からも責められたが一月後悪びれずに運動に戻った。高橋くら子は今までの研究者には「思想に賭けて生き抜けなかった平凡な女」、失踪事件も「くら子の女としての弱さの発露」という評価しか与えられていないが、石塚さんは「私は逆に『くら子の女としての自立性』を見る」とされた。部落解放運動家も買春をするというような社会で、女性として生きることの苦しさは失踪の動機では、と。部落解放運動の中で女性解放への

思いが理解されなかったこと。だから、当時、一番過激な結婚前の女性が男と暮らすことを実行したのは弱さと反対に「強い意志の現れ」であり、だからこそ、悪びれず運動に戻れたのではと評価しなおしたいと言われた。

高橋くら子の小諸高女五年生の時の文章には「法律上の不同等の一例を述べれば女子には〇〇罪があっても男子にはそれが無い。これは男の人が作った法律であるからだと思います」と姦通罪について書いている。⁽¹¹⁾大嶋さんにも聖書の「姦淫の女」があった。⁽¹²⁾台湾と日本がつながっているだけでなく、高橋くら子と現代のキリスト教会もつながっている。

「性」という人間存在の根源を表す言葉が、一番星のように明るく光を持つには、今を生きる私たちにもやっぱりすることがあると思う。

〔注〕

注1

「日系アメリカ・カナダ詩集」世界現代詩文庫9 土曜美術社
日本の詩歌 中公文庫 中央公論社、新潮臨時増刊「日本名歌集成」学燈社

注2

「はちみつバイブレーション」「フェミの嫌われ方」北原みのり新水社 性について、北原みのりの著作には刺激を受けた。

注3

このコラムを大岡氏が書き続けられていることを不思議に思う。特に現代俳句、短歌で変な権力者になっているのを、

詩人としての誇りが許すのだろうか。

注5・注6、日本経済新聞一九九九年一〇月二二日夕刊

注7 「愛と性と結婚生活」ダン サン・パウロ一九九六年

注8 「身体性とエロスの復権ムメいのち豊かな神学のために」大

嶋果織「福音と世界」二〇〇一年三月号

注9 「なぜ宗教を捨てないのか」Womanspirit29号

注10・注11 「産むことは良いことか？」「教会と女性」第13集神奈

川教区婦人問題小委員会・性差別問題特別委員会

「高橋くら子像を再考するムメ同時代を生き、運動した台湾・

彰化婦女共励会を通して見た姿」石塚友子「明日を拓く」26

号（一九九八年）東日本部落解放研

注12 「姦淫の女」とは？」大嶋果織「教会と女性第9集」神奈川教

区婦人問題小委員会・性差別問題特別委員会

「二番星の性は」は、ジャネット・ウィンターソンの「さくらんぼの性は」（白水社）という書名から貸して戴きました。

「あの出来事」

岡村 聡子

はじめに

「日本人の性意識の形成に宗教は関係しているのか。」これは大きなテーマである。私は六年程前から母親サークルや幼稚園、小学校のPTAの学級で「親子で語る性教育」と題してワークショップを行ってきた。もう何十回かワークを行ってきた勘定になる。殆どが単発（二時間）だが、何回かに分けて連続講座にしたこともあった。そんな経緯から今回の執筆者の候補として名が上がったのだと思うが、このテーマは私には大きすぎる。慰安婦問題についてはフェミックスの「We」でナヌムの家のことを読んでいたが、発言できる立場にはないと思う。どのような切り口で何を書けばよいものか、迷っていた。メ切も近づいて来た頃、今回のテーマと直接切り結ばないかもしれないが、どうしても書きたいことが現れてしまった。一度現れてしまうと「あの出来事」は私の意識から離れてくれなくなった。「あの出来事」は私が死ぬまで決して誰にも詳細は明かせない、と思つて来た出来事であり、つい最近まで、棺桶の中まで抱いていこうと思

定めていたことだった。今それを書くことによって、せつかく小康状態を保っている私の精神のバランスが再び狂いを来してしまいそうで、書くことが怖い。しかし、今書かなければ私は二度と「あの出来事」について書けないかもしれない。そして、一度書き始めたそれは猛り狂う濁流のように私の中から現れて来て容易には去らない。結局予定の枚数を大幅に越え出してしまい、編集部の方にはご迷惑をおかけする。

ともあれ、私は神に祈願しながら書き始めることにする。

私のこと

私の生まれ育ちを書いておいた方が今後話が前後しなくてすむと思う。長くなると思うが私の物語に少しお付き合い願いたい。

私は、一九五七年生まれ。幼稚園から高校までプロテスタントの学校（小・高は女子校）で育った。見かけは明るく素直で、先生にも可愛がられるいい子を演じていた。が、家の中は暗かった。

私の母は中国東北部で敗戦を迎えた。母の初めての夫はソ満国境の警察官だった。一女一男をもうけるが、女の子は三歳の時肺炎で死亡。夫はシベリア抑留となり当地で死亡。敗戦時まだ〇歳だった兄を連れて三十八度線を越え何とか日本にたどり着いたという。

その時の母はまだ二十五歳位だったはずだ。その後兄を育てながら料理屋で働き、戦後十年たつ頃には独立して自分の小料理屋を出していた。一方父は一九一六年生まれ（一九八三年逝去）。大正デモクラシーと第二次世界大戦のはざまに青春を送ったことになる。五人兄弟の長男で、一時は文学を志したが文士など許さぬと祖父に一喝され一転物理学校へ。卒業後、従軍（南方ということしか聞いていない）。父は早く亡くなったので、父の戦争体験について私は何も聞くことができなかったのが今になって悔やまれる。敗戦後、父は最初の妻と結婚する。この人は医師だったそうで、戦争中女医でも従軍させられるのを嫌って医学部、薬学部、研究室と延々と大学にいた人らしい。この人との間には子どもができなかった。長男に跡とりが出来ないのは困る、ということと二人は嫌いになった訳でもなく離婚したのだという。そして数年後私の母と結婚。私が生まれた時、母が連れ子した私の異父兄は十三歳になっていた。母は父と兄との板ばさみで、家の中はいつもどこか緊張していた。私がものごとろついた頃から母は「くすり」をもっていて（今思えば眠剤のようなものだったのか）、私は登校する時「ママ、私が帰るまでしなないでね。」と言いおいて出かけるような子どもだったらしい（私にはその記憶はない）。私がいい子でいなければ、みんなをなごませなくては、

と思うようなこともあった。もっとも私は父にとつては遅くもったはじめのわが子、母にとつては中国で失ったかわいい盛りの女の子の生まれ変わりとして溺愛されて育った。生来病弱で食の細かった私は本当に大切に育てられたと思う。家には母屋の隣に「実験室」という建物があつて、そこには大きな機械や顕微鏡、ピーカー、フラスコ、たくさん薬品類があり、父は一日そこで仕事をしていた。一時は大学に戻ったこともあつたらしいが教授とけんかして辞めたということだった。技術や特許を切り売りして生計を立てていたらしい。因みに家庭用の浄化槽の特許をとつたのは父だそうである。

中学生になつて私はがぜん悪い子になる。母の言うことなすこと全てが気に入らない。急に男言葉を使うようになる(これは当時学校で流行つていたのだ)。「生んでくれて言つた覚えはないよ。」と母に言つた。「女は手に職をつけて、男に頼らないで生きていくのよ。」と私に言いながら形だけ父にかしづいている母が許せなかった。

高校生になるとそれまで素直に受け容れて来たキリスト教へも猛反発するようになる。キリスト者教師の欺瞞や偽善に苛立ち、まだ聖書学の知識も乏しかったので旧約と新約を読みくらべて「何て矛盾した教えなんだ！」と怒つた。毎朝の礼拝でも祈らない、賛美歌

も歌わない。こんな形式に何の意味も見出せなかった。時は一九七〇年初頭、高校生文化研究会という出版社が出していた「考える高校生」という新聞を購読していた高校生を中心に「神奈川考える高校生の会(略称孝高会)」という一種の社会問題研究会があつた。母の制止をふり切り、学校からの圧力に反発して定例会に出かけていった。

進路の選択で迷つていた私に高校の三年間私をかわいがつてくれた担任教師が「面白い学校があるよ。推薦できるよ。」と紹介してくれた大学があつた。パンフレットを見ると私が勉強したいと思つていた課目を履修できる。しかも地元ではないので下宿生活。合法的に家出ができる。帰宅した父に、どうしてもこの大学に行きたい、と言うと、父はしばしの黙考後「いいだろう。」そばでオロオロする母。「その代わり、あとはお前の責任だぞ。親がそばにいるわけではないんだ。どうもお前も皆と同じ道を行くタイプではなさそうだ。どうせなら無冠の帝王になれ。自分に実力をつけること。実力があれば必ず社会は認めてくれるものだ。」それは父の哲学でもあつたのだろう。父は多くの問題をかかえた人であつた。だが父は私という人間をこの世で最も深く理解してくれた人だった。

そして私は家を出て下宿し、学生生活を始めた。十八歳の春だった。

私は五年間学生生活を過ごした。そして大学のある都市の隣の県で就職した。六百床近い総合病院の精神科に勤務。ポストは心理療法士だった。就職して二年目の秋、父が心筋梗塞で急逝した。職場の同僚は慰留してくれたが、墓守り役の長女は帰郷するのが当たり前と母は思ってた私の帰りを待っていた。私も母の思いを内在化させていた。翌年、後任者が決定してから退職して帰郷。再就職、更に転職し、ようやくどうしてもしやめたかった精神科に再び職を得た。総合病院での精神科ソーシャルワーカーの仕事だった。二年後に結婚退職。自分でも考えてみたこともない決断だった。三児を授かった。第三子妊娠の前後から私は主婦であり続けることに限界を感じ始め、市民活動に関わるようになる。私の関心は子育てサークルには収まりきらず、性教育、エイズ問題、幼児虐待などに広がっていった。そのプロセスの中でフェミニストカウンセリングに出会い、大きな力を得る。

「あの出来事」を私はこの間も心の中に封印し続けて来た。時折意識にのぼるのだが、その都度当時の絶望と混乱が甦りかけ「これは決して誰にも言えない。私は棺桶の中までこの問題だけは抱えていくしかない。」と思うのだった。何故かわからない。ただそのことを想い出すだけで、手も足も出ないような、いや手足ももぎとられたような名状し難い無力感にとらわ

れるのだった。空がぱっくりと割れ、そこに闇よりも尚冥い虚空がただ広がっている。何の手がかりも足がかりもない中空で、私は確かにあの真の冥さを見た。その時の吐き気に似たいやな気分が甦ることが恐ろしく、私は三児をドタバタと追い回したり、市民活動に没頭する日常に急いで戻った。ただ、あの空の割れ目が私の隣にいつも広がっていることだけは忘れることができずにいた。

はじめての気付き

ある時、私は神奈川県女性センターから送られてきたアンケートに向かっていた。県内で何らかの市民活動に関わっている女性に送られてきたらしかった。無記名でセンターに郵送するものだった。それはセクシャル・ハラスメントに関する調査だった。今から五、六年前のことだったと思う。アンケートに記入するうちに「あの出来事」はもしかしたら、セクシャル・ハラスメントと呼ばれるものなのかもしれない、とかすかに思った。まだセクシャル・ハラスメントという言葉が耳新しかった頃の事だ。その中に、今ではうろ覚えだが、次のような質問事項があった。「あなたは何かの力関係のある中で性行為を強要されたか、或いは強要されなかったとしても望まない性行為をしたことがありますか。例①親を含む親類と子ども②教師

と生徒・学生③先輩と後輩④職場の上司と部下⑤夫と妻……私は②に○をつけた。「そのことをあなたは今どう思っていますか。」私は「どう説明すれば良いのかわからない。ただ、関係が無くなると見捨てられるのではないかと思っていたように思う。今までは誰にも言えずに生きて来た。忘れたかと思いついて来たが時折記憶が甦り、その時の何ともいえない気分の悪さ、自分の存在が全く無意味に感じられる気分突然襲われる。でも私には何が起きていたのか、多分よくわかっていなかったと思う。」という内容のことを書いたと思う。「あの出来事」を言語化した初めての体験だった。そしてアンケートを郵送した。

そのアンケートのことも忘れて日々の忙しさに追われていた頃、センターから調査結果の冊子が送られて来た。胸苦しさを覚えながら読み進めていった。集計結果の中には、私が思っていたよりもはるかに多くの女性が何らかのセクシャル・ハラスメントを受けていることが記されていた。自由記述の集計の中に私の一文が、ほぼ削られることなく載っていた。また他の女性の中にも様々な生々しい体験が記されていた。活字になった自分の文を私は混乱して読み返した。「あの出来事」は初めて対象化され、言葉が与えられた。セクシャル・ハラスメント。それがその名前だった。

「あの出来事」

ペンが止まる。書くのが辛い。昨日この原稿に向かったらとても素面ではいられなくなり、ウメツシュをガバガバ飲んだ。でも今日は素面で書く。アルコールが入った文章は読み返すと気に入らず書き直すことになる。換気扇の下でタバコを喫う。アクエリアスを飲む。祈願する。どうか私の心をお守り下さい。そして机に向かう。

「あの出来事」について書かねばならない。私は二十歳。大学三年だった。その前年、私は初めての恋に破れた。でもこのことは後悔していない。あれ程人を愛したことはなかった。だが追い打ちをかけるように、私が敬慕していたゼミの講師がヨーロッパに留学してしまった。その先生の元で私は卒論に向けて勉強しようと思っていた。これは心底こたえた。そして私は「あの人」のゼミに移籍した。仮にL氏としたい。L氏は私より十歳年上。新進気鋭の研究者だった。学園闘争の時にはノンセクトの活動家であり留置体験もあった。当時の男性の活動家達が闘争が終息すると専門分野に逃げ込んだり、ちゃっかり公務員になったり、大企業に就職していく中、L氏は当時もまた現在も専門分野を越えて広範な活動を行っている。人間的には稀有に誠実で尊敬に価する人物だと私は今でも思っ

いる。L氏について詳述すると当会の方は「ああ、あの人。」とわかってしまう方が多くいらつしやると思う。私はL氏が特定されてしまうことを望まないもので、多少話が抽象的になることをお許しいただきたい。

失恋、ゼミの移籍、卒論テーマの変更。いや、それよりもどこかで聞いたセリフだが私は二十歳だった。疾風怒濤の中にいた。L氏との距離が急速に縮まっていったのは三年の秋から冬にかけての頃だったと思う。当時の私にとつての大問題、それは「生きる意味とは何か」ということだった。人は何故生きるのか。私は何故生きているのか。人はどこから来てどこへ行くのか。私は重度の障害児に接する機会が多かった。「この子は大きくなっても何らの生産手段にもつけない。介助の負担は重くなり、両親は老い、先に死んでいくだろう。この子の生きる意味とは何なのだろう。」そのそばから私自身が再び自問する。「同じ命だ。この子は生きている。そしてお前も生きている。この子の生きる意味を問うている、お前の生きる意味とは何なのだ。」答のない問いであることを今の私は知っている。必死に自問しそれでも答が得られず、やがて問いを思い出せない程煩雑な日常に追われ、必死に生きそして死んでいく。それが人が生きるということなのだろう。でも私の場合は少しちがっていた。

L氏とは一緒に飲みに行く程近い距離になつてい

た。私はこの頃くり返しくり返しこの問いをL氏になげつけた。L氏は言った。「意味はない。」と。「意味はない。にもかかわらず人は生きる。その、にもかかわらずがいかに力をたくわえていくのか、それが人が生きるということではないのか。」今の私にはL氏の言いたかったことがわかる。でも当時の私にはわからなかった。「意味はない。」という言い方は心をえぐる残酷な言葉だった。二十歳の私がまだ確かにもつていた人間に対する素朴な信頼感、そして祈ること。それを否定された気がした。私は大混乱になってます。まずL氏をつかまえては生の意味を問うた。そしてある日、L氏と私は性関係をもつてしまう。

当時L氏は問題をかかえていた。恋愛問題だった。L氏も相手の人（Qさんとさせていただく。この方も現在ではある分野で活躍されており、著作も出されている。）も各々配偶者がいて子どももいた。Qさんは聴講といつてよくゼミに出入りしていてゼミ生とも友達のようになつていた。また私を含むゼミ生達をよく自宅に招いて手料理をご馳走してくれたりもした。年上のお姉さんという感じで違和感はなかった。今考えれば、まだ本当に小さい子をかかえていてそこまでするのには不自然だったと思う。でも当時はそれに気づける程私は大人ではなかった。ある日L氏がQさんと愛し合っていることを私に話した。それを聞いて私が本

当はどう感じたのかよく覚えていない。その時は「フー
ン。」という感じだった。私は二人が逢う間、Qさん
の子どものベビーシッターをしてくれとL氏から頼ま
れてひきうけたり、Qさんが、夫とL氏との間で引き
裂かれる心情を語るのを彼女の家で泊まりがけで聞い
たりした。Qさんも私とL氏の関係を知っていた。変
な関係だった。私は相変わらず「意味」にこだわら
ず、L氏はくり返し「意味はない」と言いながらくり返し
私とセックスする。私はQさんとも仲良くする。私は
次第におかしくなっていた。

ある日、目が三次元ではなくて二次元を見ているよ
うな気がした。その感じは日ましに強くなっていた。
精神病理学関係の本を読み漁った。離人症だった。私
は酒浸りの毎日を送った。外界が怖くてバスや電車に
乗れなかった。泥酔して川をわたる、墓場で墓石と問
答する、わけのわかんない間にわけのわかんない男と
寝て別れる別れないの修羅場になる。

大学一年の頃通っていた日キ教団の教会の牧師とは
議論した挙げ句けんかわかれています。会いたくもな
かった。統一教会をひやかしに行ったこともある。い
い人達だったがバカばかり、と思った。山里近くの
新興宗教にも行った。善男善女のあやしげな雰囲気
に逃げ帰った。坐禅もした。前述の修羅場になった男は、
この時警策を持って経堂を回っていた禅坊主だった。

大学四年の夏休みは帰郷して、一夏一步も外へ出る
ことなく父の書庫で本を読み続けた。しかし読書がで
きない。本の文字がバラバラに目の中に飛び込んで来
る。センチメンスの意味がつかめない。何とか意味をた
どろうとして赤線を引くだが、何が書かれているの
かわからない。積極的に死にたい、とは思わなかった
が、存在することがこんなに辛いのなら存在しなくな
りたい、とずっと思っていた。

L氏とQさんは各々の家を出てアパートを借り、Q
さんの二児とともに同棲を始めていた。L氏との性関
係もこの頃にはなくなっていた。だが毎日大学でL氏
と会う。私はL氏の元で卒論を書かなければならな
かった。

瀕死の思いで卒論を書き、何とか大学を卒業する見
込みのついた私だったが、心身共にあまりにもボロボ
ロのため、とても就職できない。私はここでまたL氏
に助けてもらってしまう。同じ都市の教育大学の専攻
科に行ったらどう？と勧められたのだ。他に選択技の
なかった私はそこに何とかもぐり込んだ。だが前から
わかっていたことだが、ここにL氏は非常勤で教えに
来ていて私は顔を合わさなければならなかった。

私はこの一年の殆どを寝て過ごした。布団をかぶっ
て、なぜか高橋たか子と古井由吉をよく読んだ。離人
症は少しづつよくなっていたが、この病はよくなりか

けの時が最も危ない（自殺が多い）病で、相変わらず辛かった。卒業できるだけの単位をとって論文を青息吐息で書いた。しかし少しずつ外の世界への関心も戻って来て、あるシンポジウムをきっかけに就職が決まり、翌年三月卒業と同時に引越した。もうL氏と同じ町に住まなくてもすむ、という安堵感でようやく息がつけるように思った。

二十年

社会人になり、退職、結婚、子育てと、アツという間に二十年近くがたった。しかしこの間もL氏とQさんの存在を毎月確認させられる出来事があった。二人が出しているミニコミ誌だ。L氏が巻頭言を、Qさんが編集後記を書いている。毎月律儀に送られてくるそれを「いやだなあ。」と思いながらも捨てられずに封を切る。L氏の巻頭言とQさんの編集後記がいやでも目に入る。

はじめの気づきがあつて一年たつたたずの頃だったと思う。巻頭言でL氏が大学に就職して二十年がたったと、書いていた。私が入学した年にL氏も就職した計算になる。「長いようで短い二十年だった。……はじめの頃のこととはもう殆ど覚えていない……」そのような内容だった。私は愕然とした。私が今だに苦しんでいる「あの出来事」、それを彼は覚えていな

いというのか。確かに教師をしていれば教え子は一学年何十人もいる。学生は教師にとって現れては消える存在なのだろう。それにしても、よくも、よくもこんなことが言えたわね。

数日後迷った末に私はL氏に手紙を書いた。「あなたは忘れたらしい出来事が、私には今だにフラッシュバックのように鮮やかに蘇り、今も私を傷つけ続けている。もうミニコミの送付は止めていただきたい。私は今後、カウンセラーとの間で私の手当ての作業を続けていく。」という内容だった。（この時はフェミニストカウンセラーではない別のカウンセラーの元に通っていた。）手紙を出した翌月からミニコミは送られて来なくなった。ホッとした。でもQさんはどう思っただろう。恩知らず、と思われているのではないか。私の心には安堵と不安、その両方があった。

その手紙をだしてからどの位時間がたっただろう。ある夜、夫が仕事で不在の深夜、L氏に電話しよう、突然そう思った。酔った勢いもあった。でも今でなければ電話できない、そんな気がした。しばらくしてL氏が出た。懐かしい声。「寝てた?」「うん。」「ごめん。Qさんは?」「仕事で出張してる。」「子ども達大きくなったでしょ?」「うん、こっちの子ども達は……。僕の方の子ども達は……。」「お互いの仕事の話。他愛もない会話。最後にL氏は「気が向いたら手紙でも下

さい。と言ったら失礼かな。」と言った。罵倒の言葉も糾弾の言葉も私の口からは出て来なかった。

手紙の後の深夜の電話。こう書いていると私という人間は一体何をしているんだ。アホとちがうか、とフト思う。でもこの一步がふみ出せずに二十年近い歳月を私は生きてきたのだ。傷の手当てもできぬまま。

二冊の本

『ライ麦畑の迷路をぬけて』ジョイス・メイナード著
東京創元社

『狂わされた娘時代』ビビアンカ・ランブラン著
草思社（タイトルの前に『ボーヴォワールとサルトルに』と小さな文字が入っている。）

この二冊の本をこの一、二年の間に読んだ。そして思った。私と同様の体験をしたのは私だけではなかったのだ。私は一人ではなかった。この二著は前者がサルンジャーと、後者がサルトルとボーヴォワールと、各々一時期愛人関係（この表現が適切であろうか）にあり、その後無惨に捨てられ、それでも生きぬいて、自分を傷つけた者達と対決した女性のドキュメンタリーである。関心のある方にはお勧めしたい。

下書きではこの二著について詳述し、私の意見も書いたのだが、今、私にはここにそれを記す気力が残っていない。ただ、この二人の女性がいかに大変な仕事

をしたのか、その勇氣には本当に頭が下がる。そしてこの二冊の本によって私は以前より、より鮮明に私に起こった出来事とそのカラクリに気付いた。

自尊心の殺害ということ

この原稿にとりかかってから、私はとても具合が悪い。昨夜もいつもの倍量の眠剤をのんだが二時間たつても眠れない。小さなことで子どもに当たる。「今の原稿の仕事で私はすごく怒りっぽくなつて、君達に当たってしまったてごめん。」と謝る。「よく祈願して心を守ってもらった方がいいよ。」と上の息子と末娘が言う。夫は「なにそんなに疲れているんだよ。好きなことやつてくるくせに。」（勿論原稿の内容は知らせていない。）あー単純！この単純な男とだから十五年夫婦してこれだけのだけだ。

もうひとつだけ、どうしても書いておきたいことがある。このことも今まで人に言えなかったことだ。

私が入学した大学は、偏差値的には三流校だった。私はそのことに人並みに劣等感を抱いていた。でもだからこそ頑張ろうとも思っていた。がし氏との混乱した関係のさなか、ある研究会でし氏の研究仲間の他校の教授に「センスはいいけど頭が悪いってのは君？」とからかわれた。私のいないところでし氏は私のことを何といっているのだろう。その頃よくし氏から言わ

れた言葉。「君はセンスがいい。でもセンスだけでは現場に出るとつぶれてしまう。君には期待しています。頑張つて。」耳元でそんな言葉をくり返されているうちに「私は頭が悪い？私はバカ？そうよね？だって本も読めない、自分が何をしでかすかもわからない。私は無能、私はダメ……」

社会人になってから田川建三氏主催の「指」の合宿でたまたまQさんと一緒になったことがあった。夜の懇親会でQさんはL氏と共に出しているミニコミについて淀みなく説明していた。「つれ合いの職場は三流大学なのですが、卒業生との交流や活動の支援を広げるためにミニコミを出しています。云々。」彼女の言葉は私に深くつきささった。「あんたに言われたくないよ！」しかし私は深く傷ついただけで何も言えなかった。

私の生まれ育ちから考えても私はAC（アダルトチルドレン）である。このことに気付いたのも比較的近いことだ。ACはもともと自尊心が低い。だから過剰に頑張ったり過剰に傷ついたりする。でもL氏とQさんはその私のなけなしの自尊心の息の根を止めた。人間は自尊心なしには生きることのできないものなのに。

私の自尊心がかすかに息を吹き返したのは就職してからだ。ことに厳しくて皆に恐れられていたドクター

は、何故か私をとて可愛がつてくれた。関連病院の医局スタッフがもち回りで、週一回行う症例研究会は、毎回発表者がつるし上げられるとても厳しい会だった。入局して半年目に、ひと月程かけて必死で書いた不登校の子どもの症例を発表し、珍しく皆にほめられた。「期待のニューフェースだね。」センスだけでは生きていけない、頭が悪いと言ったのは誰だ！私はセンスも磨き、努力もし、正當に評価されたぞ！私はひとりで祝杯をあげた。

旅はまだ終わらない

何故私が、とりわけ性のテーマ（性教育、エイズ問題、セクシュアリティなど）に引き寄せられてしまふのか、今まで長い間わからなかった。気がつくといフラフラとそちらの分野にのめり込んでいたのだ。私は無意識のうちに私の自尊心の、瀕死の深手を負った魂の手当てをしようとしていたのではなかったか。恐らく予想以上に多くの女性が私と似たような痛みをかかえながら生きているのではないか。「あなただけではいよ、傷ついたのは。よく生きてきたよね。ここにもいるよ、私もそうなんだよ。」私は誰彼かまわずそう言い回りたかったのかもしれない。それが私のワークの真の姿だったのかもしれない。そして、この原稿を書き終わろうとしている今、私はようやく生

還への道へはつきりと一步をふみ出そうとしているのかもしれない。

私の旅はまだ終わらない。

池田さんへの再反論について

鶴岡 瑛

先号に池田さんから私への反論があつたすぐ後、奥田さんから他の仏教女性会員に、次には仏教側から（私ではなく）別の人が書くようにとの申し入れがあつたそうです。

今回の論争は、池田さんの偏った仏教批判から始まりました。「ナヌムの家」を仏教徒が支援していることには頼かむりで、〈負〉の面だけを取り上げての仏教批判はおかしいのでは？〈罪惡深重〉の自覚に生きた親鸞を〈罪の概念が希薄〉と言ったことも、単に〈言葉足らず〉とは思えません。どちらも初めから仏教批判の意図があつてのことでしょうか？

それに私が反論すると今度は、たくみに論点をずらしての自己弁護、問題をすりかえての私への批判、私たち（？）はこれだけの勉強・活動をしているのだと

自己宣伝が返ってきました。中でも〈専門家の意見を聞きたかったので：がっかりした〉との当てこすり、私が〈被害者たちに長い間沈黙を強いてきた〉者たちの同類であるかのような言いがかりは、感情まるだしの、議論のルールを踏み外したものと言わざるをえません。

また自分は旧フェミログ系統の者ではないと言われるのは、先々号に自分で書かれたことと相違します。今回の文章からも、池田さんはフェミログの人たちから大きな影響を受けていると感じます。これ自体は小さなことです、舌先三寸の不誠実さを感じます。

次には私にこれらを正す機会を与えるのが、フェアではないでしょうか。ところが私が分割掲載でもいいからと、一〇月二八日に送った原稿は〈長すぎる。分載もだめ〉と言われて返却されました。〈他の人と不公平になる〉そうですが、では池田さんは？

先号の池田さんの反論を読んで、宗教とフェミニズムについての姿勢に大きな隔たりがあることを痛感しました。またこの会も学者や研究者の方が多くなり、私のように生活の場からものを考える、素人の言葉が通じる場ではなくなっていることを感じます。ここに記したような経緯からしても、このギャップを埋めることは絶望的でしょう。

そこで去年限りで脱会の決心をし、返却原稿を切り詰めて一二月一五日付けで送り直しましたがまたもやボツとなりました。そしてへー〇枚以内に収めることへ掲載しておいて脱会するのは無責任。脱会を前提にしないことへの条件を守るなら掲載しようと云われました。

自身DVや性的被害の古傷を持つ私が、これらの問題について語るのに一〇枚では絶対に無理です。でも掲載していただく為には仕方ありません。そこで上のような表題にしてこれまでの経緯も記し、残された紙数に合うよう問題を絞り込むこととしました。また脱会是一年間延ばすこととし、その間に必要があれば応答することを約束することで、与えられた条件はクリアーできるものと考えます。もっともなにかあれば応答はするつもりがあることは奥田さんに伝え、その時は会費の追加請求をしてほしいと言つてあつたのです。

宗教について、私は信仰の点から問題にしています。池田さんは信仰はおきざりで、宗教をへ社会を変革する手段としてのへ有効性へだけで問題にしているのではないでしょう。信仰は度外視して、宗教にそういう役割だけを期待するのは危険だと思えます。

宗教は両刃の剣です。宗教が信者の精神や日常生活

まで嚴重に規制し、社会のあり方を左右するほど強大化するの、歴史的に、また現在世界中で起きている宗教がらみの紛争を見てもわかるように、宗教に起因する問題を引き起こす恐れ、野心家に利用される恐れさえあります。私は仏教のゆるやかな規制のあり方をまだしもと思っております。

では仏教徒には共通の道徳や倫理観がないのかと云われれば、そんなはずはないと思います。仏教に限らず本心に宗教において神・仏に触れ信仰を確立した個人なら、そこに自ずと自分なりのものの見方、生き方が確立されるし、それに従つて規範が生まれるはずで。仏教における僧伽さんかの本来はそうした自立（律）した同信者の集合体です。この僧伽さんか本来の意味がまったく忘れられているのが、日本の仏教界の悲しむべき現実ですが…。

先に私が書いた（三つの疑問）に関連して、スぺースが許すかぎり書いてみます。

一つめはへなぜ日本人慰安婦が名乗り出ないのかへの疑問に、彼女らはへ名乗り出ないのではなく、出られないへと書いたことについて――彼女らは加害国日本の国民で、どのような仕事かはおよそ承知して契約をしています。強制、あるいは騙されてなった人、外国人とはこの点が違います。彼女らはこの点でさら

なる重荷を負わされているのです。

〈自虐史観派〉はこの点を利用して、外国人も含むすべての元慰安婦を〈承知でなった。商行為だ〉と強弁しているのではないですか。それはむしろ意図的なものですが、池田さんのようにそこをあいまいにして他国の遊廓で働いていた人のことまで持ち出してくるのも問題を紛糾させるものです。どんな経歴を持つにしろ、その人たちは異国の軍隊によってむりやり慰安所に放り込まれたという点で、素人の女性となら変わりない犠牲者です。

私は契約をして慰安婦になった女性についても、公娼制度を許す社会の犠牲者であると考えています。ですから〈彼女等が自分の意志でなったからといって、慰安婦制度の犠牲者でないとはいえない〉と書きました。池田さんはそれを読まれていないのでしょうか。

日本人としてこの社会に生きる彼女らが名乗り出たら、同朋である日本国民から〈承知でなかったくせに〉という非難を浴びせられ、社会から爪はじきされることは明白です。

現に名乗り出たある日本人女性の場合は、自殺という結果に終わっていることを、池田さんが知らないはずはないのですが。〔参照 岩波ブックレット『朝鮮人従軍慰安婦』〕。

自ら慰安婦になることを選択した人の、敗戦後の生活が恵まれた順調なものであったとは、まず思えません。そのことが名乗り出たいと思う人の足をひっぱることもあるでしょう。逆に家庭的、社会的に恵まれた生活をしていれば、なおのこと名乗りにくいでしょう。彼女らが「名乗り出ない」のがおかしい、社会が間違っている、それは仏教のせいだというのは、心情を欠いた理屈にすぎません。理屈では生身の人間の苦痛は救えません。

自分を被害者として名乗り出て加害者を糾弾して償いを求めるか、それとも自分を守るためにひっそり生きるかを決めるのは被害者自身であり、被害者の権利です。社会がどんなに被害者に理解のある社会であったとしても、〈ひっそりと沈黙したい〉と思う人の選択を尊重しなければ、被害者と痛みを分かち合うことにはなりません。

二つ、三つめは一緒にまとめます。法律上の責任者である昭和天皇は東京裁判によって免責され、死亡に際して国民からも免責されてしまった現在——加害者も大半は死亡したか相当の高齢になっているいまになつて、生き残りだけを法廷に引き出し処罰しようというのは不公正だ、とたしかに書きました。私は少なくとも実名くらい公表して裁くのかと誤解してしまし

た。それは誤解だと、去年の二月にこの会である人に訂正され了解しました。池田さんが云われる「女性：法廷」の昭和天皇についての裁きに期待することにしましよう。

それでも「今になつて」という気持ちは変わりません。私が慰安婦問題を知ったのは、今から三五年も以前『婦人公論』ででした。それになんの反応もなく、この問題はずっと黙殺されてきました。私も自分の一身上のことで精一杯で、特に専門的な勉強や支援をしていない後ろめたさから「発言する資格はないが」と書きましたが、それ以来他の戦時の女性に対する加害と共にずっと関心は持ち続け、女は戦争の惨禍を語り続け、戦争に反対しなければならないと思ってきました。これではフェミニストとしては不足でしょうか？

池田さんは慰安所の利用者であつた一兵士にまで加害責任がある、責任者は処罰しなければならぬと主張されていますが、それが本当に元慰安婦の人たちが求め、「女性：法廷」の目指していることですか？それは池田さんの個人的意見ではないでしょうか？

私もフェミニストのはしくれのつもりですので、日本が加害を認め、謝罪し、補償することの必要性を認めています。また現在強まっている女性に対する性的加害を、戦時においても平時においても、防止していくとする、将来へ向けての取り組みには——もちろん

ん大賛成です。そうした大きな目的——社会の理解を求め、社会が変わることを求めるためには、硬直した正義を振りかざした非寛容・攻撃的な姿勢は、逆効果ではないかという思いは変わりません。それではフェミニズムの裾野はいつまでたつても広がらないのでは？

先日テレビの「女性：法廷」の関連報道で、ある被害者の証言を見ました。彼女からは加害者への生な憎しみは感じられませんでした。憎しみを超えているからこそ彼女の告発は、人の心を打つ力を持つのではないのでしょうか。傷ついた者が自己を回復する道は容易ではありません。彼女の苦悩の深さを見て、被害者は加害者の分まで、問題をになつて歩んで行くのだという思いを深くしました。ここにこそ真の宗教性——祈りがあると感じました。

女と国家——観念による呪縛

A『古事記』(二五)

河野 信子

若い女 さきに申しました性染色体のXO型をめぐって、デンマークの医師団が(アルス精神科病院)検査をして、パターン化しています。

視覚・空間能力は言語能力よりはるかに劣り、平均的女性より低い。図形を誤認し、算数も苦手、このパターンは、ターナー症候群の女性全員にみられ、伝統的な女性の仕事や言葉を使う職業につき勝ちだ。(ジョーダーデン・スミス・ダイアン・シモータ・セックス&ブレイン、池上千寿子、根岸悦子訳 工作舎 一九八五年参照)他に外見「女性」にはXX型の人もある。外見男性にはXY型XXY型もあり、それぞれに紹介されている。XXY型はアメリカだけで四〇万人いると記されている

老婆 血液型性格判断のように大ざっぱすぎます。臨床実験パターンに、どこか歪みがあるのではないのでしょうか。識別モデルがヒトの複雑性に対応できなくて、個人差よりは相等性による分別をしているように思えます。外挿法ともいえます。

若い女 内分泌系と神経系の作用にどのような構造と

創出をもたらすかについては、XOをめぐっても、まだくわしくはわかってはいません。

生理学が、決定論を離れXOを相対的なものとして、ゆらぎのなかに置いて、しかもなお相互作用について、なにがしかの段階まで書き抜くには、時間がかかりそうです。

老婆 試行錯誤もくり返されるにちがいありません。生命体へむかう検証は、大胆に仮説を提出しつつ、慎重に行動する必要もあります。何となし、プラス・マイナス零になってしまつて、「馬鹿な考え休むに似たり」に私自身が限りなく近づいているようです。接線方向に飛ばされるのが落ですか。

若い女 私にできることは、「女性性誇示」の人びとをXOでないかと疑ったり、不妊の女たちを差別したりしないことだと、いまのところ考えています。いっぽうに内分泌攪乱物質の問題がありますので、人類がすべて、ターナー症候群かクラインフェルター症候群となる日が来るかもわからぬといった、未来喪失予感がないわけではありません。しかし今は、性ホルモン一元論でない、ホルモンの豊かさに期待したいところです。

有機体のなかにあるものにむかつてもお、こんなことを考えてしまいます。XX染色体の二つ目のXはテストステロン(男性ホルモン)をつくり出すとい

われていますけれど。

老婆 では、ひとの精神界が愚かなのか、唯一者を幻想したがるのかわかりませんが、そろそろ、超越体を幻視するとき、性についての思弁は、女と男と超越性といったように、三つ巴になっていたようです。その歴史から考えていきませんか。まず単性生殖から――

――ここに左の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、天照大御神。次に右の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、月読の命。次に御鼻を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、建速須佐之男命。『古事記』倉野憲司校注 岩波文庫 一九六九年本)

と、まことクローン人間作りのようで、ございますこと。

若い女 世界の神話のなかでも、男性による単性生殖というのは珍しいのではないでしょうか。

老婆 これは人の見た夢といって、無視するわけにはまいりません。「共同幻想」となると力を持つてきます。家父長制も国家も神話も共同の疎外態となって人を呪縛しましょう。

スピリチュアリティにひかれて

高橋としえ

この会に入会させていただいて脱会しようと思ったことは一度もなかった。集まりにはほとんど出られず、ウーマンスピリットを読んだり、会合の案内状を見るだけでも、私はフェミニズムに近づいていられる、そんな想いを持てたからだ。

それにしても一時、草の根フェミニズムという動きがあつたけれど、あの現象はどんなふうに男性社会の中でうやむやにされてしまったのだろう。検証する価値はあると思う。

市井の女性達の多くは、対夫、対家との関係の中で、本音はフェミニズムに共感しながらも、フェミニストの前では、欺瞞的態度で反目している。そういう女性達のなかで、私は起き伏しているが、それを支えてくれているのは、私のささやかな禅仏教に依る信仰と、この会が、スピリチュアリティということを大切にしている、ということからだ。

あたりを見るに、近頃のフェミニズムは、学問化され、細分化され、フェミニズムを表現する語彙は複雑化している。その中で、この会のスピリチュアリティーということばで表現される、ウーマンスピリットは魅

力的であるし、包容力もある。

時々、ひとりつぶやくスピリチュアリティ。これからも市井の中で生きる私は、かつて自分自身に課した命題のほとんどが、このスピリチュアリティという一語の中に溶けてゆくを感じた。私の細い道が見えてきた。

そんな時、折にふれて作った詩を、この度詩集としてまとめた。改めて手にしてみて、自分なりにやや不満はあるものの、とにかくひとつの節目にはなった。今後、更に、スピリチュアリティを支えに詩作が続けられることを願ってやまない。

人を当てにして生きることについて

小泉美奈美

何を書いてもいいということでお引き受けしたが、読み書きが苦手な私は、引き受けたことを後悔しながら月日が過ぎていった。また言い訳をしなければならないと、暗い気持ちになってきた。しかし、今回は書こう。電話相談から見えてくる女性問題でなにか書けるかもしれない。だが、普段思ったり言ったりしてい

ることが、書こうとしても纏まらない。考えてみると、仕事柄、女性問題といっても結局は家族問題になりそうである。

私は児童相談所内にある電話相談「子ども・家庭一〇番」の電話相談を仕事にしている。相談対象は原則として〇歳から一八歳までの子どもを持つ家庭である。相談内容は養護、保健、言語発達、知的障害、虞犯行為、不登校という相談もあるが、圧倒的に多いのが母親からの育児相談である。〇歳から五歳までと、中学生に関するものが多い。その他に「その他」に分類することになる、母親本人に関する相談も多い。

五〇代前半の母親からの相談例について考えてみたい。

この母親は某市内で姉から建ててもらった一軒家に、二一歳と一九歳の息子と一緒に暮らしている。ピアノ教師として、自宅でピアノを数人に教えて生計を立てているようである。彼女は結婚して姑と同居するが、姑と合わず、さらに夫が再婚であることを隠していた事実を知り、家族はいがみ合うようになる。そして夫の暴力が始まり、彼女は苦しんだ。この時期に夫が県外に転勤になり、彼女はもう一度やり直してみようと、一緒について行ったが、夫の暴力は治まらなかった。その暴力は激しく、彼女は逃げるようにして、二人の子どもを連れて某市に帰ってきた。

そして、離婚して一〇年になる。その間、二人の姉の家族からずいぶんと援助を受けたようである。彼女の相談内容を話す前に、二人の息子たちに触れておきたい。上の子は中学二年から不登校になり、「このころの教育相談センター」に通って、中学を卒業し、定時制高校・昼間部を卒業する。普段はおとなしいが、爆発的に怒りを表し、暴力を振るうことがある。学校を卒業したが、就職しないで家で過ごしている。外出するのはコンビニへ行くときか、本屋か、ビデオレンタルショップへ行くときだけであるようだ。下の子は中学二年生まではひょうきんなどころのある、優しい、母親思いの子でもであったようだが、中学三年になると、母親に対して反抗的になり、母親と口論になると、蹴飛ばしたり、ものを投げたりするようになってきた。この頃、母親は「こころの教育相談センター」や児童相談所に相談している。その時の相談は、結局のところ、子どもとの関係を改善したいというよりも、子どもとのことで辛い思いをしている母親の話を聞いて欲しかったようである。

それから三年半経った昨年の秋に、「子ども・家庭一〇番」に一〇日おきくらいの間隔で七回の電話があった。彼女の相談内容は主に三つである。一つは、下の子が母の言うことを聞かず、反抗的で、ものを投げたり蹴飛ばしたりする。就職しても続かず、パチス

ロにはまりこんで母や母の姉に借金を繰り返している。現在はパチンコ屋に勤めているが、それも母は気に入らない。二つ目は、姉から建ててもらった一軒家から、姉の財産処分の都合で、出なければならぬ。姉は代わりに、姉所有のマンションに住むようにという。しかしそこは六畳二間で狭くて、ランドピアノを置いて母子三人が暮らすには窮屈であり、またそこではピアノも教えられない。職安へ行き、他の仕事を探してみたが、合う仕事が見つからない。それにピアノは生きがいであり、それが無くなれば生きていく張り合いがない。その上、一軒家を借りたいと思い、姉に保証人になって欲しいと依頼したが、「歳だから」と断られてしまった。三つ目は、母は下の子を頼りにしているのに、彼は家を出て一人で暮らしたいと言いつ出した。そんな風に言われると、生きていく気力が無くなり、死んでしまいたい。

彼女は、このようなことから、八方塞がりで、生きている張り合いが無く、死ぬしかない、と訴えている。しかし、どのように改善していったら好いかという話にはあまり乗らず、本人の辛い状況を聞いて欲しいと、三、四年前と同じことの繰り返しをしているように思われる。言い換えると、「だれもわたしに協力し、援助してくれない」「子どもは育ててもらった恩を忘れて、親の困窮を知らながら、家を出ていく」という愚

痴を聞いてもらいたいということなのだろうか。しかし、視点を変えて、子どもの親離れ——自立——と考えると、親はそれをクリアできたと喜ばなければならぬのだが。

私がこの事例を通して考えさせられたのは、「他人を頼りにして生きる」という生き方である。彼女の場合が多分、親、夫、姉たちを頼って、子どもたちを育てて生きてきた。五〇歳を過ぎた彼女は、親は亡くなり、夫とは離婚して、そして姉たちは歳をとったので頼りにしないで欲しいと言われて、彼女が頼りにしていた人たちを頼れない状況になってきた。二人の息子はようやく独り立ちできる年齢になったが、上の子は家に引きこもりがちで、多分精神科に通院していると思われる。頼れるのは下の子であるが、その子は母の意に反して、子ども扱いされ、干渉されるのが嫌で、家を出て自立すると言いつ出した。

彼女は他人の支えなしに一人で生計を立てなければならぬ立場になった。五〇歳を過ぎてから女性が経済的に、精神的に自立することはどんなに大変なことだろうか。不安に思う気持ちはよく分かる。私も他人事ではない。しかし、周囲の援助がないことにいつまでも腹を立て、嘆いていても、自分が苦しくなるだけのように思う。どこかで区切りをつけて生きなければ、無い物ねだりをしないで、有るものに目を向けて、で

きれば有るものに感謝して生きていくようになれば、大分彼女は楽になるのではないだろうか。私がこういう立場になったら、そうできるかどうかは不安であるが、目標は、地面を這ってでも私自身が自立できるようにになりたいと思っている。

身近な話題から

飯田 智子

NCCキリスト教アジア資料センターが今年度一杯で閉鎖されることになったと聞きました。私は岩田澄江さんが総主事をされていた頃、パートスタッフとして働いていました。一九八二年に設立されたセンターは「アジア通信」という月刊誌としてアジアにおける民主化・平和・そして女性の活動など生の声を掲載していました。また様々な集会在開催されました。一九九七年に、フェミニズム・宗教・平和の会と共催で「へ日本万歳／＼史観を問う」という緊急集会を行いました。一九九六年末から結成された「新しい歴史教科書をつくる会」の動きに対し、黙って放っておくわけにはいかないと、まさに緊急に開かれたものです。

引き続き一九九八年にも「再び問う」かたちで集会が開かれました。このような活動を担う団体が一つ終焉を迎えることを非常に残念に思います。一方の「新しい歴史教科書をつくる会」は右翼的新聞社、出版社など多くと手を組んで連綿と活動を繰り広げています。恐れていた中学校の歴史教科書から「従軍慰安婦」や「南京大虐殺」の記述が大幅に削減されるだけでなく侵略行為を美化する方向に進められています。中国や韓国政府・マスコミがこの問題に対しはつきりと懸念を表明しているのに対し、日本政府やマスコミそして日本人々々ほどのくらい危機感や関心度があるのでしょうか。先日NHKのETV二〇〇一『戦争をどう裁くか』で、先に行われた「女性国際戦犯法廷」についての番組を見ました。この法廷で戦時下の女性に対する暴力が人道に対する罪であることを明らかとし、海外メディアにも多く取り上げられ、国際的にも様々な面から意義深いものであったと評価される中で、傍聴した一人、秦郁彦氏のコメントがありました。「商行為だった」「証拠がない」「東京裁判で終わっている……」など当初から何の代わりもないナショナリストぶりで本当にいらしてしまいました。

私は現在は私立幼稚園の事務をしています。幼稚園業界で話題となっていることに、「五歳児の就学の選択制」問題があります。内閣総理大臣の私的諮問機関

である教育改革国民会議が昨年七月に中間報告として「教育を変える一七の提案」を提出しましたが、この作成段階で「五歳児の幼稚園や保育園への就園率が高いことや子どもの身体的成長が早くなっていることから、義務教育の開始年齢を保護者の選択と学校の判断により一年程度早めることを可能にする」ことが提案されました。最終報告では「今後さらに検討する必要がある」ということになりました。「国際化の中でわが国が必要とする人材をいかに育成するか」「独創的、創造的な活動ができる人材の育成」のためには早く入学し基礎学力を高めるのがよいなどといったことが論拠のようです。「国際化のため」「人間性豊かな日本人育成のため」といつていくら早い時期から英語や道徳、奉仕活動を強制しようと、植民地支配や侵略戦争を美化するようなことを教えても何の役にも立たないどころか、逆効果です。

先の教育改革国民会議の「教育を変える一七の提案」ですがここでは全部を紹介しませんがなんだかおかしいものがあります。一見短絡的に見えるような政策が、日本のある方向に向かって方向付けているように思えます。正しい情報を得て、注視し、行動してかなければならないと、この原稿を書きながら改めて思っている次第です。

空き家ではなく

岩田 澄江

「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが見つかからない。それで、「出て来たわが家に帰ろう」と言う。戻ってみると、空き家になっており、掃除をして、整えられていた。そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊と一緒に連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうになると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。この悪い時代の者たちもそのようになる。」（マタイ12:43-45）

* * *

イエスの譬話の一つである聖書のこの個所は、ずっと私にとって気になる個所でしたが、意味があまりはつきりしないものでした。けれど何か日本の姿を示しているような気がしてなりません。それは日本の敗戦という、日本国の「空き家」状態を幼い時に経験したからかもしれません。

「汚れた霊」に對置されるのは、「聖なる霊」すなわち「聖霊」です。「汚れた霊」は、きわめて居心地の良かったわが家を追い出されて、水も無い荒廃そのものの砂漠をうろつき、休み場所を探して歩きます。万策つきて戻ったわが家は、意外なことに空き家のまま

で、あたかも「汚れた霊」の帰りを待ってでもいたかのように、掃除され、室内はきちんと整えられているではありませんか。「汚れた霊」はそれならばと、「自分よりも悪いほかの七つの霊」である仲間を連れてきて住み着くことになります。

そういう訳で、その家の状態は前よりも悪くなってしまうというのです。人間の体は「神の宮」「聖霊の宮」と聖書では言われています。私たちの体を聖霊が宿り、聖霊の光の住む所としないならば、悪しき霊が沢山住み着いてしまうのだ、とイエスは言っているのです。

そこで日本の敗戦ということを考えてみます。日本が戦争に負けたとき、国民の価値観は一八〇度転換しました。それまで強いられてきた暗く、自由のない生活から、何はなくとも平和と自由を、そして国民が主人公となる（と聞かされた）民主主義を、私たちはもる手を上げて喜び迎えました。ここで日本の国を「家」に譬えるならば、それまでの軍国主義的な考え方の一切を掃除して、きれいに掃き清めた空き家にしてしまったようなものでした。それからその家を、私たちはずっとそのまま空き家にしておいたのでしょうか。

その家にそれまで住んでいた帝国主義や軍国主義の代わりに、私たちは平和や民主主義を住まわせたようなつもりになっていました。しかしながら、歴代の首

相の演説を聞くと明らかなように、一九六〇年代頃から、それまで「平和と民主主義」と必ず唱えていたのが「平和と豊かさ」に変わりました。朝鮮戦争の時に変更した、逆コースと呼ばれる米国の対日政策は、冷戦という時代状況の中で、日本を北東アジアにおける共産主義に対する防壁とするために、天皇を免責し、日本の戦争責任をも問わないというものでした。ですから朝鮮戦争やベトナム戦争に便乗した経済の高度成長をとげる中で、政治家たちは民主主義の代わりに繁栄を謳歌するようになり、エコノミックアニマルという物質主義的日本人像ができていきました。

（それゆえに戦争中の加害者としての立場が問われる、例えば「従軍慰安婦」問題が白日の下に論じられるようになるには、フェミニズムによる目覚めが必須であったにしても、冷戦構造の崩壊もあずかって力あったということが、今になると分かります。）

昨今のこの国の状態を見ると、戦後「空き家」になったこの家には、知らない間に何と多くの「悪しき霊」が住みついたことかと驚くばかりです。この「空き家」は国であるばかりでなく、私たち一人一人の「人間」でもあります。私たちの心の中に住んでいるのは一体何でしょうか。バブルという潮が引いた後の残骸が残った、荒涼たる心の風景にたじろいでいるのが、私たちの今の姿ではないでしょうか。まさに「その人の

後の状態は前よりも悪くなる」と言えるかもしれません。

私たちの心の中に民主主義や、あるいはフェミニズムを住まわせるのは確かに大切かもしれませんが、それ以上に大切なのは、心の中に主義（イズム）ではなく、神の息吹きである聖霊に住んでいただくことではないでしょうか。聖霊は風や光に譬えられます。神にあって生きるということは、教条的な主義によって生きることではなく、神の霊によって、風のように生きることだと思ふのです。主義によって生きること（主義者ノ）とは次元が違ふと思います。そして、この「霊（スピリット）」は、宗教に関係なく、すべての人々に与えられるものです。

敗戦のときに軍国主義などと一緒に日本人が捨ててしまったもう一つのものは、日本のそれまでの良き伝統でした。戦争に負けて自信を喪失してしまい、過去ものは殆ど一切合切無価値だとしてしまったのです。しかし日本人の心に古来脈々として流れてきた良いものを忘れるのは、本当に勿体なく、あってはならないことでした。日本的なものは何も右翼の専売特許ではなく、保守反動になることと日本の良き伝統を大切にすることとは、本来別なことです。実例として次の二つの古歌は、大切にすべき日本人の心を伝えています。

何事のおわしますをば知らねども

かたじけなさの涙こぼるる (西行)

わけいるる麓の途は多けれど

同じ高根の月を見るかな

二〇〇〇年十一月一七日の『週刊金曜日』に、こんな投書の一節が目に入りました。「一般的に日本では、宗教もイデオロギーも強く意識されることはないですよ。そんな精神的真空状態に、夢いっぱいを装うディズニー(ランド)は見事にはまり込んでいるように思えます。」まさに「空き家」を意識している発言です。

また、十一月一八日の「朝日新聞」には瀬戸内寂聴さんの、現代の日本のありかたを強く嘆く記事が載っていました。冒頭でまず「いま必要なのは日本の大掃除だと思ってるんです」とあります。「敗戦ですべてを失い、失ったものを取り返そうと、戦後の日本人は目に見えるものだけを追いかけてきた。そのために、人間の心や宇宙の生命のような、目に見えないものの想像力や畏敬の念を失ってしまったんです」というのです。戦後の空き家にいつのまにか住みついたものを、もう一度大掃除する必要があるということです。

今、中国にはキリスト教徒の数が目ざましい勢いで増えていて、その数は一千万を越えると言われています。数年前に北京の崇文門教会での日曜礼拝に参加したことがあります、大きな会堂であるにもかかわら

ず、席をえようと思ったら早朝に行かない限り不可能なのです。会堂から溢れた人々は庭の椅子で、TVをとおして礼拝に参加していました。文化大革命後の開放改革の波の中で、目まぐるしく変わる価値観に翻弄された人々は、確かなものを求めて教会にきているようにでした。

世界中いたる所で人々は大きな歴史の流れの中で苦しんでいます。その流れの中、多くの人々が空き家の中で、何を信じたらよいか分からずにいるか、あるいは、沢山の「汚れた霊」にのつとられた家の中で、惑い苦しんでいる今日、私たちの心は何者の住まいであるかを第一としなければならぬかを、再考したいと思います。

「フェミニズム・宗教・平和の会」と私

N

いつも「ウーマンスピリット」を楽しく読ませていただいております。浅学な私には、とても勉強になります。今回何か文章を……と依頼があり、以前お断りしているので今度は逃げられないと観念し私がなぜ入

会したのかを書くことにしました。

少し自己紹介をしますが、私は一九六〇年代生まれで福祉施設で働いています。事実婚の彼と二人暮らしで信仰は特にしていません。

私は十代の頃より世の中には様々な差別があることを読書を通して知りました。人種差別・性差別・障害者差別・学歴差別……。同じ人間なのに何故なのだろうと思ひ、その歴史的・政治的背景が分かるにつれ差別のない社会を作りたい！その為には何をしたらいいのだろうと悩みました。そして自分が直面した差別問題に対しては自分なりの活動を起こしていく事にしたのです。福祉労働者となったのも事実婚にしたのも、そんな理由からです。

宗教については私の友人知人の中に熱心なクリスチャン、プロテスタント、創価学会員がおり強い勧誘を受けましたが、どれも「我が宗教のみが唯一の宗教である」という独善的、排他的感じが納得できず入りませんでした。（敬虔な祈りや求道者としての生き方にはとても心引かれるのですが……）

そして私は過去の戦争の事を知れば知るほど過ちを繰り返してはならないと強く思い世界の全ての人々が差別のない平和な生活を送れるようになればいいと願っています。

私がこの会に入会した理由は「差別のない平和な世

界」を作る為に必要な思想や具体的方法——独善的、排他的でない宗教と言ってもいい——を自分なりに探究したかったからなのです。今はまだ暗中模索の状態ですが、真実を見つける日が来ることを信じて今後も学んでいきたい思います。

ジレンマのなかで

平野 裕子

ぎこちないアルファベットで書かれた、ポーランドの子どもたちからのカードを受け取ると、ある種の後ろめたさのような気持ちに襲われる。その「後ろめたさ」の正体は何なのだろうか。

27号で書いた絵本の送付を続けているのだが、なぜ「後ろめたい」のかというと、理由が二つ考えられる。一つは、彼等を鏡として、自分の子ども時代の再認識をしているのではないだろうか。それは自分のためであり、彼等にとつては迷惑なことかも知れない、思えることである。

二つめは、カトリック教会や信者の方々の手助けなしにはやっていけないにもかかわらず、カトリックの

階級的組織には馴染めず、とくに女性に対する位置付けと対応に、溝を感じることがある。

こんな気持ちを抱えながらやっていて良いのだろうか、やがては折り合いがつけられるものなのだろうか、という思いである。

このジレンマと一緒に去年の万聖節をはさんで、ポーランドへ行ってきた。一月だというのに地球全体が温暖化傾向にあるせいか、例年になく、まだ木の葉は黄色のまま樹々にしがみつき、「黄金の秋」といわれる晩秋の姿をみせていた。

万聖節「十一月一日・聖人の徳を偲ぶ日」、翌日の万霊節「一日・亡くなった近親者や先祖をまつる日」は、ポーランド中の墓地が墓参りの人々で混み合い、それぞれの墓碑は花で飾られ、ロウソクが灯される。夕方から夜にかけては、墓地一面に灯されたロウソクが、頭上の大木の黄葉を照らし出す。その光景は見事に美しく幻想的で、聖人や故人との対話をより親密で深いものにしてくれる。人々は、まるでその時刻を選んで来ているようにも見える。あちらにも、こちらにも祈ったり、対話したり、子どもに先祖のことを話したりしている様子が窺えるからだ。

その万霊節の日に、絵本のことに関わっている友人アーニャと会った。彼女は自分の学んだ小学校（八年まである）で歴史を教えている。学校の三分の一の生

徒たちが貧困家庭の子どもたちだという。話をしている喫茶店の私たちの所へ、表情の哀しげな七、八歳の男の子が、片方の手の平を差し出しながら物乞いに来た。彼女は、手帳に走り書きをしながら、

「ここに行けば食事ができるからね。友達もいるよ。」

と、頷く男の子に、修道会の運営する「子どもの家」の住所のメモを手渡した。この祝日は、子どもたちにも、特別な催しと食事が用意されている。彼がメモを片手に店から出ていったあとには、やりきれなさだけが残った。

彼女は、何年も前から約束していたエバ・シエルブルグ・ザレンビーナ（一八九九——一九八六）の墓へ案内してくれた。それは、ルブリンのバス・ターミナルから西へ三十分程の、温泉の湧く療養地ナウエンチュウにある。数々のポーランドの作家や芸術家たちが保養地として、また創作活動の場としていた地でもある。

エバ・シエルブルグは、子どものための小説を書きながら、ワルシャワに子どもの病院を造り、貧しい子どもへの教育支援をした人だと彼女から聞かされていた。ナウエンチュウの墓地も墓参りの人で賑わい、エバ・シエルブルグの墓碑は、すでに花で飾られ幾十ものロウソクが灯されていた。そこには夫、ユゼフ・ザレンバの名も一緒に刻まれていた。

すでに薄暗がりのなか、歩いて五分程の、エバが一歳から一八歳まで過ごした家の跡も訪ねてみた。二年程前に、その土地は人手に渡り、女性購入者が、残っていた家を取り壊してしまったのだという。アーニャは文化的価値に理解のない人だと怒っていたが、写真でみると四、五十平米程の平屋の小さい家だ。近くのバス停広場には、ナウエンチュウの友人ら有志一同で立てたエバの石碑があつた。この碑にも幾つもの花が捧げられている。この地で庭師をしていた父と、仕立てをしながら生活を支えていた母を両親に持つエバ・シエルブルグの生涯を、このナウエンチュウの人々が、どんなに誇りに思っているかが、石碑からもアーニャからも伝わってくる。

ポーランド東部では、人里離れた野に建つロシア正教の小じんまりとした木造教会、耕地の片隅やあぜ道に、小さなチャペルやマリア像の祠が立っているのを、国道沿いによく目にする。それはちょうど日本の山里にある寺や、野の祠地蔵の風景と重なり合つて見えてくる。過酷な歴史のなかで人々は、教会に行けない時には、近くのこのチャペルや祠のマリア像に祈ったり、執り成しをお願いしてきたことが想像できる。

数年前にアーニャの母と会った。その時彼女は、夫の病気を治してくれるよう、奇蹟を起こす地元のマリア様に毎日祈りに行つたのに、聞き届けてはもらえな

かった、マリア様は、夫を天国へ連れて行ってしまった、と涙ながらに話していた。そういう時、わたしのフェミニズムは萎み、一緒に涙が流れてしまう。

私のジレンマはジレンマとしてそのまま残っているのだが、そうしたものが自分の中にあると自覚しているだけで、良しとしておこうと思うのだ。このジレンマを解決したり、折り合いを付けようとすることは、今の私には難しい。それより、始めたことは続けていくこと、関係を絶やさず続けていくことのほうが、大事に思える。

「どこかで不正がおきているのを知っている者は、何人といえども黙っていることは許されない——性別も年齢も宗派もそして政党も、沈黙の理由にはならないのである」。ユダヤ人が、少女売春を商売にしている実態を、一九一一年に研究報告したユダヤ人女性、ベルタ・パッペンハイムのことだが、遠くに聞こえてくるような気がした。

特別養護老人ホーム実習体験記

平嶋三生子

今年の一月から二月にかけて、介護ヘルパー二級取得の為に訓練校へ通った。一昨年失業した時、OA科で学ぶか、ヘルパー科で学ぶか迷い、OA科を選択したのだが、昨年再度失業の憂き目にあい、今回はヘルパー科で学ぶことにした。県の雇用促進事業の支援を受けてのことである。

受講してすぐにわかったことは、ヘルパーでは生計が成り立たないということだった。月平均十萬以下の収入だとのこと。それでも、乗りかかった船、最後までやりとおすことにした。

講義が終わり、いよいよ施設で四日間、実習することになった。私は評判の悪いF苑と指定された。なんでも、実習生をこき使うことで有名だそう。

電車とバスを乗りついで四〇分ほどのところにF苑があり、七〇人ほどの痴呆の高齢者が入所している。年齢は、八〇代から九〇歳位とのこと。主任と呼ばれるNさんは、やくざもどきな口調で、ちゃんと見張っているからね、いい加減な働き方したら、学校に報告するよと言った。随分、すさんだものの言い方をする人だなと驚いた。福祉現場で働いているくらいだからさ

ぞかし心温かい人達なのだろうと、フツは想像するが、現場の大変さを予感させる彼女の口調だった。

初日はデイケアサービスの日で、バンで職員と共に利用者のお宅に迎えに行く。痴呆があってもしっかりと意識を持つている人もいれば、明らかにそれとわかる利用者もいる。家族はそれぞれ暖かく送り出しているように見うけられた。

歌を歌ったり、ボランティアのオカリナ演奏があったりで、午前中は過ぎた。利用者が楽しんでいる風にはお世辞にも見えない。ただ、決められたプログラムをこなしている風に見える。昼食はそれぞれが黙々と食べる。一応自立している人々なので、介助は必要ない。

午後になると、入浴。車椅子の人は介助がいる。衣類の着脱は女性でも手伝えるが、入浴室に移動させる際の力仕事は大抵男性が主力となる。女性は汗だくで手伝う。利用者は、すいませんねとか、ありがとうと、必ず言う。残存能力のある方は、やはり、人手を借りないで自分でやろうとする。甘える人も中にはいるが、大抵の人が自分のことは自分でやりたいらしいのがわかる。

入浴後はカラオケで過ごす。横になりたい人はそれも自由。いずれにしても、なんだかそれぞれが時間をもてあましているのがありありとわかる。奇妙な風景

である。

二日目で気になる人がいた。もつれた口でしきりに何か訴えようとする。よく聞いて見ると「こわい、こわい。口と心が違う。」と言っている。後でわかったことだが、自宅で虐待を受けているらしい。失禁をして、おびえていた。「お母さんが怒る。お母さんがこうしてつねる」と訴える。職員が「大丈夫よ、きれいにしたから。私たちが守ってあげるからね」となだめる。守るって言ったって、どうやって守るんだろう？と私は不安になった。施設のオムツを使ったのだが、その場の雰囲気では、オムツ代を請求するような雰囲気だった。ああ、あの人は又、家でしかられるんだろうと想像した。青たんをつくって、デイケアにくることもあるらしいから。

残りの二日間は、入所している人たちの介護。一階の人たちは、痴呆とはいえ、意識のしっかりした人たちで、ほとんど介助はいらない。「わたくし、うでございます」と、美しい言葉使いをする人がいる。一見、何も支障がないようできて、話していると、やはり、話しかかみ合わない。うつすらとお化粧をし、装いも美しいのに、痴呆ということで、施設暮らしになつていく。なんだか、悲しい。健常者は演技が出来るが、痴呆になると、今までの生活歴がすべてあらわになるのもわかる。こわいなあーと思う。

二階の入居者は、重度の痴呆の人たち。ステーションの周りにたむろしている光景は、初めての私には異様に見えた。彼女たち（女性が多い）なりに、コミュニケーションを求めているのだろう。声をかけると、それぞれに返事が返ってくる。部屋の外に出ない人たちというのは、むしろ痴呆が重度といえるのかもしれない。

寝たきりで、管を通して栄養や薬を摂取している入所者もいる。声が届いているのかどうかわからないが、健常者に接するのと同じ態度で声かけをするのが基本とのこと。痴呆でも千差万別で、家族の訪問に笑顔で反応する人もいるそうである。ここでも考えこんでしまった。命の尊厳と、人は簡単に言うけれど、私が、こういう状態になったとしたら：

食事は介助の必要な人についた。職員のやり方を見ていると、機械的に流しこんでいる。それも、相手の目線まで腰を低くすることはしない。私は親切な職員のアドバイスで、椅子にこしかけて介助をした。腰痛を防ぐためである。学校でも、施設でも、「声かけ」をするように言われる。で、その通りにした。が、その入所者は言った。「あんたは、色々言うから：（うるさい）。痴呆といえども、侮れない。そんな経験を幾つもした。老いて病んでいても、対等の関係で接することの大切さは、現場で実感した。座学でも学んで

いたことだが。

とにかく、入所介護は忙しい。ベッドメイキングに始まり、清掃、食事介助、車椅子の移乗、衣類の着脱介助、トイレ介助、オムツ交換など。私が一番困ったのは、「声かけ」。痴呆の人はコミュニケーションが難しいので、通常の会話はできない。学校では、ただ受容せよと教わる。聞くしかない。正直なところ、もともと無口な私には苦痛以外のなにものでもない。

夜勤は二人で、七〇人ほどの入居者を見るとのこと。人では足りないとは言え、無茶な、と思う。

志厚く、施設のスタッフになっても、徐々にすさんだ風になるのもわかる気がする。とにかく多くの仕事を、小人数でこなそうとしている。どこの施設もこうだとは思わないが、介護を受ける側としては老いて病むことの淋しさを感じた。もののように扱われる。そして、働く側としては、どんなにやりがいのある仕事でも、報酬が低いのでは生活のかかっている人はヘルパーにはなれないのだとわかる。私の友人でヘルパーをしている人は言う。３Ｋの仕事だよと。確かに、きついし、汚い。やりたいことで食べていけるのは、ほんの一握りのひとなんだろうなあーと、骨身にしみて思う四日間だった。

内なるディコンストラクションをめぐる

樫村 忍

個人的な事柄に終止することをまず許していただきたいと思います。

九五年の四月から一年間、それまでの仕事をやめて、仏教のある宗派の学校（全寮制）に在学しました。一年制の学校（学院と呼ばれています）で、つまり、一年間でその宗派の僧侶たるべく基本的な学習や行^{ぎょう}などを習得（修得）し、世に送り出されるという訳です。

学院での一年間は三つの学期に分けられていて、四月から七月末までの一学期は主に教学にあてられ、九月から一二月末までの二学期は、専^{もっぱら}ら行（礼拝、読経、様々な所作などを段階的、系統的に実践。電話や手紙などのコミュニケーション手段が一切禁じられる）の毎日。そして一月から三月の卒業までは実習と教学の日々という一年です。

朝五時の起床から夜九時の消灯まで、勤行、下座行（掃除）、食事当番、授業作業など退屈する間もない程の日課が組まれており、また逆に、短い休憩時間に、ふと囲りの山々の緑の移り変わりや、院生たちとの語らいなどがより愉しいものであったりもしました。

しかし、それとは別に、私自身の中にある、仏教に

対する概念と、その宗派の教義の世界との乖離（のよ
うなもの）を感じていたことも事実です。その宗派を
開いた教祖の確立した教えの世界が、釈尊の教えの内
容と、私自身の中でどのように整合されるのか。そし
て、そのような「不整合性」を自分が考えるべくテー
マとして抱きながら学院生活を送っていました。

当初私はこの不整合性を次のように考えていまし
た。つまり、仏教という大きな森があつて、たくさん
の樹木（宗派など）があり、私の宗派もその中の一本
の樹として捉えればいいと。この考え方は基本的には
現在も変わらないのですが、ただ私自身の中で、見方
が変つてきたといえますか、つまり一本の樹と同様に、
他の樹もそして森全体を観ていけばいいのでは、とい
う訳です。

入学以前のことになりますが、自宅の近くに住む知
人は、キリスト教のある宗派の信者で、時として訪ね
て来られ、話などされていかれました。その宗派の小
冊子なども読んでいました。また、オウム真理教が様々
な事件を起こしていた頃で、私自身、宗教的なもの
の世界への関心は深まっていたのですが、ふと思つた
ことは、様々な宗教の教義でなぜ物質論や宇宙論（物
質の成り立ちや、宇宙の法則はかくかくしかじかと
いった記述）が述べられているのだろうか、というこ
とでした。

世界の子供の三分の二は常なる空腹に苛まれ、世界
の一人あたりの一年間のエネルギー消費量を一ヶ月で
消費する富める国もあれば、一日の薪と水を確保する
為に二、三時間も費やさなければならぬ人々もいる
という状況にあつて、物質の成り立ちや宇宙の法則が
その教義の中で説かれることがどんな意味を持つのか
：素朴な疑問を感じていた訳ですが、学院生活の夏休
みに手にした本が（直接の答えではないのですが）、
問題に対しての見方を質的に変えてくれるような興味
を与えてくれました。

『宗教と言語 宗教の言語』（八木誠一著・日本基督
教団出版局）という本で、その中の言語のジャンルに
かわる部分を引用しますと、

——言葉の種類には大きく分けて三つあり、客観的な
事柄について客観的に述べる言葉（*referential language*）、事柄が
語り手の内部のことで、語り手自身がなんらかの仕方
でそれを表出（表現）する言葉（感情表出言語＝*emotive language*——表現言語）、そして、語り手が
受信者に働きかける言葉（*conative language*＝*conative language*——要求・約束言語）の三つ。

氏はさらに、哲学の言語、宗教の言語について述べ
ていますが、ここで私が取り上げたいのは、最初の二
つの、記述言語と表現言語についてです。引用を続け

ますが、

——記述言語を全体として記号としてみた場合、それには二つの主要な意味がある。それは指示対象と記号内容である。だから、指示対象と記号内容が空無である記述言語は無意味である。ということは、指示対象が無い、あるいは特定不能な場合、また内容に関して検証不能・反証不能な場合は無意味だ——

として、敬虔なキリスト教徒でもある氏は次のように述べる。

——このように考えた場合、「神とその働き」という言葉については指示対象（神）は客観的に提示不能ないし不定であり、働きの内容も不定で客観的には検証・反証不能だから、その限りでは「神とその働き」は記述言語としては（傍点著者）無意味だ——

この定義に従えば、仏教「一切衆生悉有仏性……」（一切の衆生はことごとく仏性があり……「涅槃經」）という言葉も、記述言語としては意味をなさない、と言えます。

しかし、前述のいずれの言葉（「神とその……」「一切衆生……」）も、表現言語として捉えれば、私にとって理解不能ではありません。

氏は「イエスの言葉に即して」（第六章）のところで、宗教の言語について詳述していますが、無謀な解釈になります、私は表現言語の要素を拡大して、上記の

言葉を表現言語として捉えたいと思っています。なぜなら、いずれの宗教の書物も、語り手の内部表出的表現と見ることができると思うし、また、仏教、キリスト教に限らず、信仰に即した書物を読む際に、こうした区分け（きわめて私的なものでありますが）があれば、読み進める上で、その内容が理解しやすいと思うからです。

さて、なぜ私が言語のジャンル等にこだわりの、その上で問題を考えたりするのかと言いますと、八木氏が前述の著書でも述べていますように、「言語なしには文化はない。人間が人間となるについて言語は不可欠である」「人間の言語能力は自我の成立ということと深くかわっている」と思うからです。ですから、言語（学）について多少とも学ぶことによって、先述しました「不整合性」や物質論・宇宙論の記述に対して考える上で、別の側面から問題を捉えうる、と思う訳です。

では、九五年以前の私の内面を振り返ってみますと、一つの考え方があったような気がします。それは「すべては疑い得る」（デカルト）というものです。特にこのことを強く感じたのは、ナシヨナリズム、そしてフェミニズムの問題に出会ってからです。

日本の近代史は、明治の富国強兵、アジア各国への侵略戦争、そして一九四五年の「終戦」というカタス

トロフィーを経験した訳ですが、その背景をなす思想は、暴力装置としての国家主義（ナショナリズム）であると思います。そのナショナリズムという思考の枠組みを変える流れはありますが、大きな流れにはなっていないようです。振り返ってみて、日本は侵略戦争に対する諸々の責任を果たさなければかりでなく、侵略戦争であったことすら認めない姿勢を強めています。道義的責任はなおさらのことです。つまり、日本という国は、自分の行為について何も考えていない、あるいは考えようとしない国である訳ですが、このことは畢竟私自身にも突きつけられている問題です。

なぜ私がアンチ・ナショナリズムの立場をとるのかと言いますと、つまり自分が日本人であることに本質的（根本的かつ普遍的という意味で）な理由があるとは思えないからです。ある人が、例えば日本人であるというのは、政治的側面から見たアイデンティフィケーションの、一つの説明でしかありません。しかし、ナショナリズムは、言語や文化などと深く結びついているが故に、「日本人として生まれた」というような発想に陥りやすいのです。この発想の大きな誤りは、生まれて後の、様々な条件などによって賦与されるアイデンティティーを、あたかも存在に先立つかのよう

に表現しているところにあります。
日本の近代史を観た時、私は自分の中にある「日本

人である」ことを疑わない訳には行きません。そしてこのことが、「私」を「私」たらしめている要素を脱構築していくという方向になったという訳です。

「私」は「他者」ではないのですが、「他者」であったかもしれない——これは記述言語ではなく表現言語ですが——ということは考えられる訳です。なぜなら「他者」は存在しており、これはとりもなおさず「私」という自己が特別な存在ではないということを意味しています。ナショナリズムはこれとは逆行する発想で、それは「他者」（自国以外の国・国民）の存在否定につながるものだと言えます。

そして、フェミニズムに関してですが、少し述べてみたいとおもっています。観念的ではありますが、自分自身が生物学的「性」の一つに属していることの必然性はどこにあるか、と考えています。そもそもそういう問題の設定がおかしいのかも知れませんが、なぜそう思うのかと言いますと、ジェンダーに関する様々な問題が起きている中であって、性差位をつける側の、当の本人（たち）が「男」性として存在していることを何か必然性があつた上でのこと、のようにつづっているとおもいます。売買春、従軍慰安婦問題、男女間の賃金格差、セクシャル・ハラスメント、育児、家事の役割：など、ふるまいの結果と言えらるおもいます。

二つの例をあげてみたいと思います。一つは大相撲で、優勝力士に知事杯などを授与する時に女性を土俵にあげることに關しての問題ですが、相撲協会は「土俵は神聖なものであるから云々」として、反対しています。

もう一つは、最近世界遺産に日本が推薦する暫定リストに加えられた山上ヶ岳（奈良県天川村）で千三百年間続いてきた「女人禁制」のことです。むらの反対派は世界遺産への登録は「女人禁制」という伝統が壊されるとして、登録されなくてもいいと言う。

このことで想起されるのは和歌山県の高野山のことです、この山の盆地一帯も明治五年までの千年以上、女人禁制でした。しかし、明治五年の博覧会の開催に伴い、西洋各国の外交団などを迎え、京都、奈良などの観光の折、高野山が夫婦同伴で山に上がれないのは問題だ、と指摘され、それで女人禁制が廃止されたとのこと。

それまでの千有余年間は一体何だったのかと考える時、山上ヶ岳の「女人禁制」の無意味性が見えてきますし、大相撲の土俵問題にある邪惡な幻想（土俵が神聖で、女性是不浄の存在）が浮かびあがってきます。

過去の経験に学ぼうとしないのは、政治家だけでなく、宗教にたずさわる者ですらもそうであることを思うと、疲労感におそわれます。

自分の「性」を解体、脱構築してその背後にあるものをはたして言語化し得るのか、私にはまだわかりません。『ジェンダーと権力』という本で著者のロバート・W・コンネが序文の中で述べている言葉を引用します。

——人間が経験する身体の大部分は、なによりもジェンダー化された身体である。また集団間の不平等のうちでも、女性と男性とのあいだの社会的不平等は、最も広範かつおそらくは最も堅牢で最も不公平だと言える不平等の一つである——

「私」自身を「私」自身たらしめている（と私が思っている）事に関して、「すべては疑い得る」という觀念の下、ディコンストラクションを試みて、まだその試みは始まったばかりです。

2000 年活動報告

- 1.12 例会「私たちの如是我聞——仏教とジェンダーをめぐって」
 発題者 女性と仏教 東海・関東ネットワーク会員
- 3月 Womanspirit 第 29 号発行
- 4.8 例会「文学と宗教」
 発題者 山下暁子「家族神話——菅原孝標女と日本現代カトリック文学」
 宮澤邦子「神話の解体——現代イギリス女性作家とキリスト教」
- 9月 Womanspirit 第 30 号発行
- 9.26 例会「胎児・女性・宗教権力」
 講師 大嶋果織
- (2000 年の例会は岩田澄江、小澤治慧さんが担当してくださいました)

2000 年会計報告

<収入>

繰越	176,858
年会費	230,000
冊子売上	43,000
集会参加費	17,500
カンパ	20,000

合計	487,358
----	---------

<支出>

印刷費	160,000
通信費	39,840
講師謝礼	32,582
施設費	7,300
文具	4,694
コピー代	2,250

合計	246,666
----	---------

現在高	240,692
-----	---------

編集後記

日本軍性奴隷制を裁いた女性国際戦犯法廷を特集するNHKの番組が直前に出演者の許可なく改ざんされたり、新しい歴史教科書をつくる会の教科書が許可されそうだったり、歴史認識と人権意識に欠ける人々が権力に浸透していることを思い知らされるこの頃。不況と言われる時にとりわけ好戦調のものが出やすく、人気を獲得しがちです。こうした時にこそ、権力から遠いところにいる者たちが手をつなぎあわなければと考えたりします。奥田さんが書かれているように、今度こそ日本でも女性どおしが支えあえるようにならなければと思います。そのために、性意識と身体の問題をじっくりと考え直すことが重要になるのではないかと、考えさせられました。

(小松加代子)

昨年、ある世界宗教の日本組織の高位の人と会ったとき、彼の「たと言葉でも自分の宗教を批判する人は殺されても……」という発言がショックだった。彼は日本人だし、日本という国での発言だったから。すべての宗教と国の責任者は「殺傷をはじめ、大声や威嚇などの行為を、私のためにすることは、私が禁じる」という声明を出して欲しい。話は変わり、今号のこと。

身体と心と言葉は深くつながっている(当たり前か……)。性意識もその全部につながるもの。私はこの間まで「霊で生きよ」という言葉のまま生き(多分!?)、自分に身体があるなんて思わなかったが、身体があるのに気づいた今は、自分の身体、身体につながった自然な心や感情や言葉を愛したい。シスターフッドって言葉も心から大好き。

(山下暁子)

今号は最初、原稿の集まりが悪くどうなることかと思っていました。小松、山下さんの奮闘のおかげで、いつもよりも多くの原稿が集まりました。そのため、初めて書いてくださった方の原稿を優先し、一部は次号に回させていただくことにいたしました(早くお送りくださった方にはお詫びします)。今号の特集テーマについてご意見やご批判をお待ちします。また、このWOMANSPRITは会員でつくる冊子ですから、いつでも自由に原稿をお送りください。中野さんがつくってくださいているホームページへのご意見も歓迎します。今年度の例会は宮澤邦子さんと千葉悦子さんが担当してくださることになりました。新しい年となりましたので、年会費をよろしく願います。

(奥田暁子)

Womanspirit No. 31

2001年3月発行

発行 フェミニズム・宗教・平和の会

連絡先 〒180-0014

武蔵野市関前5-5-25

T / F 0422(53)8746

E-mail Akikovv@aol.com

<http://www.josei.com/womanspirit/>

郵便振替 00170-9-8031

定価 700円

印刷 (有)オクノプリント社